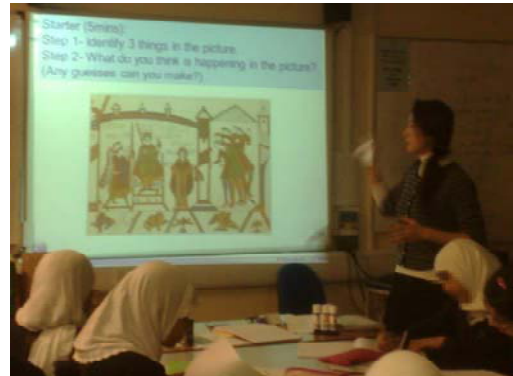


1. 授業事例

Ms. Ayako Ito (伊東彩子)；“Three Claims to the Throne”の授業記録
 (2011年1月6日, Central Foundation Girls School, KS3⁽¹⁾, 第7学年, 11~12歳)

【明かりのついた教室。生徒たちと教師が授業の準備をしている。教室の前のスライドには、「バイユーのタペストリー」から、ハロルド王の戴冠式の場面が映されている。】 《00:00 授業開始》



Ito 先生：静かに。さあ、よく聞いて。これからスライド学習を始めましょう。5分間で、やることは2つあります。スライドを見てほしいので、明かりを消しますよ。【教室の明かりを消す】はしっかり見えますか？ おしゃべりしないで黙って、3, 2, 1, はい。ジェニファー。そうです。ペンを出しましたか？ ノートの新しいページを開いて、そこに書きなさい。さあ始めて。書き終わったら、学習目標にかける時間を教えますから。そうです。

【先生は生徒たちの出席を取っている。名前が続くが聞きとれず。】

Ito 先生：やってほしいことは2つ。まず最初に、スライドを見て。この画面に何が描かれているか、少なくとも3つあげましょう。それについて説明してください。そして次に、この場面で何が起きていると思うか、口に出して言わなくていいから、「短い文章で簡潔に」書きなさい。皆さん、今はディスカッションの時間じゃないから、1人でやるんですよ。その後で皆で話し合います。じゃあ、ソミア……。

【先生は生徒たちの出席を取っている。名前が続くが聞きとれず。】

Ito 先生：【出席を取り終わって】はい、いいでしょう。エッセイを返してもらっていない人、私のカバンに入ってるんですが、まだ返せないで、全部読むまで待ってくださいね。そうね、もう2分ぐらいあげます。この画面に何が描かれているか、少なくとも3つは書くこと。どんなものでも、人間でもかまいません。それから、何が起きていると思うのか、この場面はどんな出来事を表しているのか、考えましょう。人々が持っているものとか、真ん中や左側でものを持っている人物とか。

生徒たち：わかりません。

Ito 先生：この画面に左利きの人が描かれているのがわかりますか？ じゃあ、書かれている言葉は全部は読めないでしょうが、名前が見つかるのでは。

生徒たち：ハロルド。

Ito 先生：ハロルド。そう、人の名前が書かれていますね。ハロルドって。この人は誰だと思いますか？ 思いつきませんか？ じゃあ、30秒あげます。

生徒：先生、私、質問2の答えを書きます。

Ito 先生：質問2は、この場面で何が起きていると思うかということですね——どんな出来事？

生徒：この人たちは戦っています。

Ito 先生：あなたは戦っていると思うの？

生徒：はい、だって、みんな剣を持っていますから。

生徒：首を切ってたんです。

Ito 先生：そう見えますか？

生徒：はい。

Ito 先生：だったら、これは何？

生徒：兵士です。

生徒：王様です。

生徒：違うわ、玉座よ。 《05:00 経過》

Ito 先生：それじゃ、クラス全体で話し合いをしましょうか？ ペンを置いて、しっかり聞きながらスライドを見てください。では、この画面にどんなものや人が描かれているか、わかりますか？ まず——はい。



生徒：王冠です。

Ito 先生：王冠？ じゃあ、王冠を被っているのは誰？ はい。

生徒：王様です。

生徒：すごく高い椅子に座っている男の人です。

Ito 先生：高い椅子？ 特別な椅子だけれど、何と言うのかしら？

生徒たち：玉座です。

Ito 先生：玉座——よろしい。では、この人は誰でしょう？ 誰かが王冠を被っていたら、それはどういう意味ですか？

生徒たち：その人は王様です。

Ito 先生：王様ですね。じゃあ、王様のまわりの人たち、彼らは何をしていますか？ ジェニファー。

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：違います。エジプトとかそういう所のことを話してるんじゃないよ。そう、この図柄は……。

これは、実はタペストリーなんです。壁に飾る長い織物の布のようなもので、これはそのほんの一部です。本当は絵だと思うかもしれないけど、絵ではありません。この色合いは織りあげた布のようですが、さまざまな色の糸を使っているんです。【訳注：「バイユーのタペストリー」は、長い布地に刺繍をして、模様を縫い取ったものである。タペストリーは、ふつう多色の糸を使って模様を織り出した織物製品なので、このような説明になっている。】

生徒：先生、それは王子様かもしれないでしょう。

Ito 先生：誰が？ この人が？

生徒：えーと、たぶんその隣の人です。その人たちじゃないです、先生。

Ito 先生：この人たちは？

生徒：小作農です。

生徒：貧しい人たちやホームレスです。

Ito 先生：どうしてそう思うの？ どうしてこの人たちがホームレスだと思うんですか？

生徒：生徒：家がないから。

Ito 先生：服を着ていますよ。

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：ちょっと待って。だから、違う階層の人たちなんです。前の授業で、11世紀のイングランドに住んでいた色々な階層の人々のことを話したでしょう。前の授業でやらなかったかしら？

生徒：やりました。

Ito 先生：どんな人たちでしたか。そう、王様ね……ほかに？

生徒：貴族と司教です。

Ito 先生：貴族と司教……ほかに？

生徒：騎士です。

Ito 先生：騎士ね。ほかに？

生徒：召使いです。

Ito 先生：召使い。じゃあ、どうして召使いと呼ばれていたんですか？

生徒：農民です。

Ito 先生：農民だけど、特別な呼び方がありますよ。

生徒：小作農です。

Ito 先生：その通り。

生徒：それに商人です。

Ito 先生：商人？ そうね、商売する人もいます。だから、同じ社会にさまざまな階層の人が住んでいるわけです。でも、それじゃあ、その社会のトップにいるのは誰かしら？ ちょっと待って。発言しているのは誰ですか？ はい。

生徒：貴族です。

Ito 先生：貴族？ けれど、貴族の一番上にいる人は誰？ 貴族たち全員を支配しているのは誰ですか？

生徒：王様です。

Ito 先生：王様ですね。王様が一番権力を持っている人です。実際、この場面で王冠を授けられていますね。王



様になったところなんです。それがわかるのは——この人たちが手に持っているもの——彼が身に付けていたり、手に持っているものが3つあるでしょう。1つは、そう、王冠です。では、あと2つ、手に持っているものは？

生徒：杖です。

Ito 先生：普通の杖ではありませんよ。

生徒：剣です。

Ito 先生：剣ではありません。その3つは王様の権力の象徴なんです【訳注：王冠・王笏・宝玉の3つ】。ところで、今のエリザベス2世が女王になったときの写真を見た人は何人いるかわからないけれど、これとまったく同じものを手に持っていました。この3つは、戴冠式という特別な儀式で使われるものです。だから、王様や女王様が王冠を授けられるときには、儀式のあいだ、王や女王として持つ権力を象徴するために、高僧が実際にこれを手に持つのです。

生徒：先生、王様や女王様になるとき、特別な水を注がれるというのは本当ですか？

Ito 先生：特別な水？

生徒：はい。名前があると思います。

Ito 先生：聖水ですね。たぶん大主教が祝福したものなんですよ……。

生徒：……何か粉が入っている水では。

Ito 先生：さあ、それはわからないわ。

Ito 先生：はい。それじゃあ、それは誰の戴冠式でしょうか？ わからないけど、思いつきませんか？

生徒：ハロルド王です。

Ito 先生：どうしてわかるんですか？

生徒：「ハロルド」と書いてあります。

Ito 先生：ここには「ハロルド」と書いてありますね。そう、それが王様の名前で、正解です。だから、王様が王冠を授けられている——これは戴冠式の場面です。でも、この出来事がどうして1066年に起こったのか、その理由を知る必要があります。今日のタイトルを急いで書いてください。理由は書かなくてもいいわ——「3人の男と王冠」というタイトルを書くんですよ。

【「Three Men and a Crown」のタイトルと、王冠の画像のスライドに変わる。】

Ito 先生：でも、どうして3人の男がいて、1つの王冠があるのかしら。どういうことでしょうか？ 3人の男たちの主張の根拠は。じゃあ、タイトルだけを書いてください。学習目標は書かなくてもいいですよ。書かないで。わかってほしいのは……。今から1066年に起こったことについて話し合ひましょう。それは何年ぐらい前のことでしょうか？ 940年ほど前ですね。

生徒：先生、それはハロルド王ですか？

Ito 先生：すぐにわかりますよ。第1部は——3人の男たちの主張の根拠です。でも学習目標のところは、今日はノートに取らなくていいですよ。 《10:00 経過》

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：タイトルを書いて、アンダーラインを引いてください。いい？ できましたか？ じゃあ、これからやることは——ハロルド王が1066年に王位に就いたのですが、実際にこの年はイングランドの歴史上とても重要な年だと、多くの歴史家——研究者たちが考えたわけを説明しましょう。彼らはそれをよく「危機の年」と呼んでいるんです。この国に大きな危機がせまっていたのです。

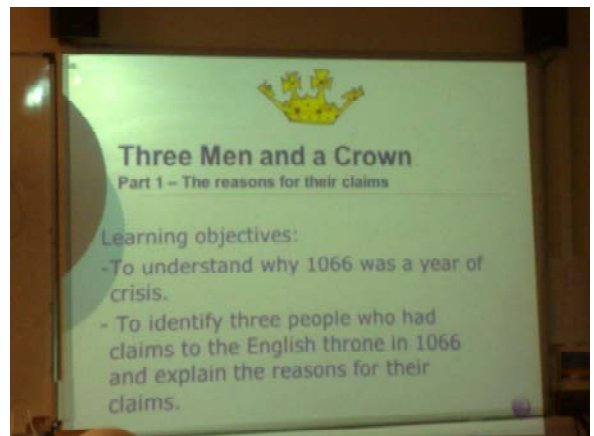
【スライドが変わる。死の床についているエドワード王の周りに人々が集まっている絵と、その解説があるスライド】

Ito 先生：その危機とは何だったのか、はっきりさせましょう。いいですか？ 準備はいい？ スライドがまだですね。はい、OKです。誰か読んでくれますか？ この机で誰かいない？

生徒：はい。

Ito 先生：はい、スピタルフィールドさん。

スピタルフィールド：1066年、エドワード懺悔王は年老いて病気になっていました。彼はやがて死を迎えるは



ずでした。けれども、誰が次の王様になるのでしょうか？
ふつうは息子が王位を継ぐので問題はないのです。しかし、
エドワードには息子がいませんでした。

Ito 先生：はい。では、1066年のその頃、イングランドでは
何が起きていましたか？

生徒：エドワード王は病気だったので、後継者が望まれてい
ました。けれど、彼には息子がいませんでした。

Ito 先生：そうね、従来は王に息子がいれば、王位は息子が
継ぐべきですが、息子がいなかったんですね。じゃあ、後
継者は誰になるんでしょう？

生徒：王様の娘です。

Ito 先生：娘もいなかったんです。子どもがいなかったのよ。

生徒：兄弟は？

Ito 先生：そして突然、エドワード王は崩御しました。亡くなったんです。誰が次の王様になるべきなのか、誰にもわかりません。これはトラブルの兆しでした。誰が後継者——権力を持つ者になるのか、人々が疑問を感じはじめたからです。本来なら、イングランドにはある制度があって、通常は「ウィタン (Witan)」という人々の集団【訳注：サクソン諸侯会議 Witenagemot のこと。Witan はこの諸侯会議のメンバーを指す】ですが、そう、その国で力を持つ貴族たち——権力のある諸侯たち——が決定権を持っていて、王の後継者を選ぶことができたんです。

Ito 先生：権力を持っている王様に後継者にふさわしい息子がいれば、その息子が選ばれる可能性が高いのですが、いない場合、王位継承権を主張する最有力者を選べます。でも、困ったことに、王の後継者だと言いつける人は1人だけではなく、3人もいたのです。実際にはもっといるんですが、エドワード王が亡くなったときにイングランドの王位を主張した、この3人に焦点を当てましょう。

【スライドが変わる。ハロルド・ゴドウィンソン、ハラルド・ハルドラーダ、ノルマンディー公ウィリアムのイラストを使って、3人の説明がされている。】さて、この人たちですが、絵は本物じゃなくて、ただのイラストです。ウェセックス (Wessex) のハロルド・ゴドウィンソン。ウィリアム——なんだかこの絵はちょっと……。

生徒：ウィリアム。

Ito 先生：そう、ウィリアムです。

生徒：端にずれているからです……。

Ito 先生：そうですね。でも私には直せないわ。ウェセックス伯ハロルド・ゴドウィンソンとノルマンディー公ウィリアムです。ノルマンディーはどこにあるか、知ってますか？

生徒たち：はい。いいえ。

Ito 先生：今年、フランスに行く人は何人いますか？

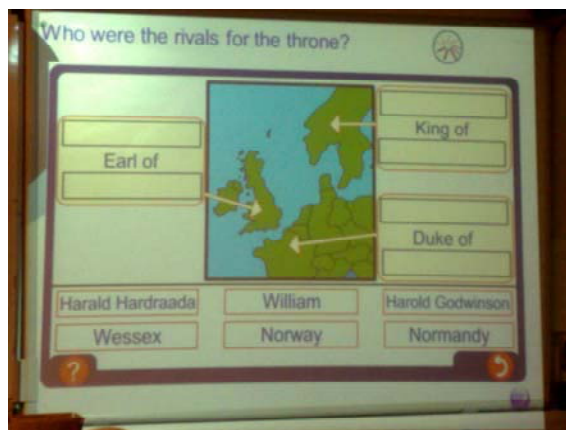
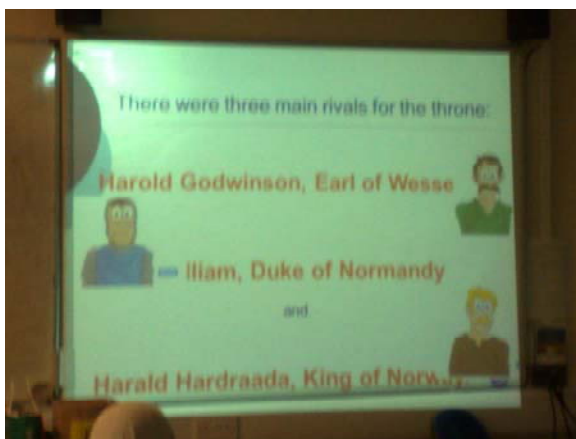
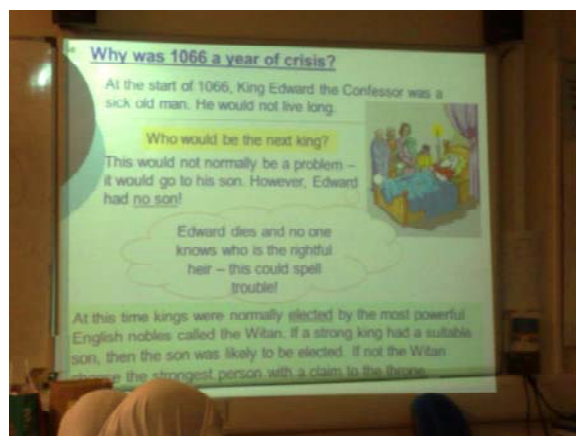
生徒：誰もいません。

Ito 先生：ノルマンディーはフランスにあります。フランスの一地方なんです。次の1人、第3の男になりますが、イングランドの王になりたがっている人がもう1人いました。ハラルド・ハルドラーダで、ノルウェー出身でした。だから王位を主張していた人は3人いたんです。それぞれが、王位を継承すべき強固な理由があると考えていました。そこで、王位をかけて戦うことになったのです。ですから、今日と次の授業でやることは、イングランド史上最大の出来事の1つを学び、結局は誰が戦いに勝ったのか知ることです。

【スライドが変わる】

さて、面白いことに——画面で見たハロルド王を覚えていますか？

生徒たち：はい。



Ito 先生：さて、諸侯会議のメンバー、力のある領主や貴族たちは最初、ハロルドを選んだのですが、ほかの 2 人はどうなったのでしょうか？ この決定に満足したと思いますか？

生徒たち：いいえ。

Ito 先生：そう、王位に就きたかったんですからね。だから、1066年に大きな戦いが起こったんですか？

生徒：誰かが王様を殺したんですか？

Ito 先生：どの王様を？

生徒：ハロルド王です。

《15:00 経過》

Ito 先生：そうです。それがこれから勉強することです。だから今は教えないけれど、3人についての情報を見せましょう。あの人たちの名前を覚えていますか？

生徒：ハロルド王……。

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：はい、そこの机の人——ナディア【聞き取れず】？

ナディア：ハロルド・ゴドウィンソンです。

Ito 先生：ハロルド・ゴドウィンソンですね。どこの出身だったか覚えてますか？ Wで始まる地名です。

生徒：ウェセックス (Wessex)。

Ito 先生：【先生が三色のカードを配っていく】ウェセックスですね。今はウェセックスという郡はなくて、エセックスとサセックスがありますが、昔はウェセックスという地域があったんです。何のことを話していると思いますか？ いいですか、3人のグループに分かれて作業してください。よく聞いて。各グループに、ピンクと緑と黄色のカードを1枚ずつ、3枚セットになったカードを渡します。それで、グループの1人ひとりがどれか1枚を読むんです。例えば、私が3枚のカードをあなたがたに渡したら、一緒にあの机のところへすわって、自分のカードを読んでください。この3人のライバルたち、イングランドの王位継承を望んでいる人たちについて、いろんな情報が書いてあります。じゃあ、1, 2, 3…



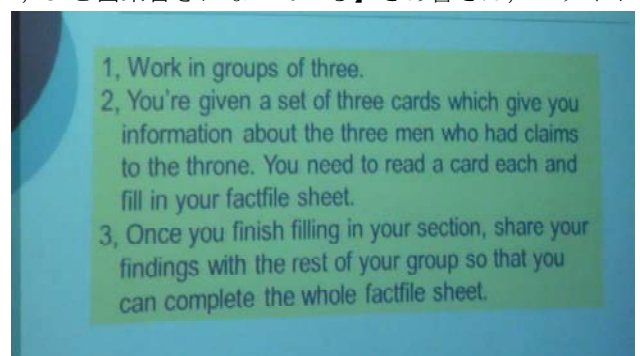
【先生が三色のカードを配っていく】

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：そう、3人で一緒に作業しなさい。じゃ、あなたの椅子をこちらへ持ってきて。それからあなたたち2人は……。

【皆いっせいに喋り、聞きとれず。先生はカードを配り終える】

Ito 先生：静かに、よく聞いて。【スライドが変わる。1, 2, 3と箇条書きになっている】さあ皆さん、スライドを見ましょう。後ろ向きの方は前を向いて。さあ、スライドを見て。まだですか。それでは、やるべきことは——また3人のグループで——4人のところもありますが——勉強しましょう。違う種類のカードがあって、いろいろな情報が書いてあります。



Ito 先生：3枚セットのカードには、王位を主張する3人の男たちについて説明してあります。この人たちはそれぞれ、王位を継承すべきだと考える理由がありました。自分のカードを手にとって、前に渡したプリントの空欄を埋めること。それで、この3人の人が誰かわかりますか？ 最初の人は誰？

生徒：ハラルド・ハルドラーダです。

生徒：ハロルド・ゴドウィンソンです。

Ito 先生：ハロルド・ゴドウィンソン……。

生徒：もう1人、ハロルドがいます。

Ito 先生：そうですね、ハロルドが2人いて、この人はハラルド・ハルドラーダです。【スライドを一つ前の地図の画像に戻す】最初のところ、最初の空欄に、「ハラルド・ハルドラーダ」と記入して。彼は王様だったけれど、どこの王様？

生徒：ノルウェーです。

Ito 先生：ノルウェーね，その通り。だから彼はここ——ヨーロッパのこの地域，北歐の国の出身なんです。では，次の人は……？


生徒たち：ハロルド・ゴドウィンソンです。

Ito 先生：ハロルド・ゴドウィンソンね。どこの国の人？

生徒：ノルマンディーです。

Ito 先生：ウェセックスですよ。ノルマンディーはフランスにあると言いましたよ——ここに……。フランスから来たのは？

Harold Godwinson
The Earl of Wessex



Harold Godwinson belonged to the most powerful family in England. They already controlled Wessex, but had ambitions to rule England. He is a good warrior and believed that England needed a strong ruler after Edward. In 1051, Harold and his father rebelled against King Edward, but were defeated and driven from the country. Harold returned the next year and soon became the most powerful nobleman in England.

He thought he had the best claim to the throne because he was Edward's brother-in-law (His sister Edith was married to Edward). He claimed that Edward had promised him the throne just before he died. Harold was also the only Englishman claiming the throne.

生徒：この，もう1人の男の人です。

Ito 先生：もう1人の人って……誰ですか？

【皆いっせいに喋り，聞きとれず】

《20:00 経過》

Ito 先生：ノルマンディー公……えーと，実は，昔の人には今のような名字を持っていない人もいたんです。称号や出身地で呼ばれていました。それでは 皆さん，よく聞いて。だから，やってほしいのは——名前を全部書いたら，カードを見て自分のカードはどの人のカードか確かめること。

【皆いっせいに喋り，聞きとれず】

Ito 先生：ですから，やるべきことは，カードをざっと読んで，プリントの空欄を埋めることです。それでどんなことを記入するのかということ——【ス

ライドが，さきほどの1～3箇条書きのものに戻る】これを写すんじゃないですよ。あなた方がどう考えるか，それを書いてください。では，やらなければならないことは何？

生徒たち：これを読むことです。

Ito 先生：読んで，それから……？

生徒たち：……それを書いて，グループのほかの人に話して……。

Ito 先生：……その人についてわかった大事なことを書きましょう。とくに，この人たちの1人，そうね，例えばウィリアムがなぜイングランドの王になりたかったのか，またどうして自分が王位を継ぐべきだと考えていたのか，その理由を書きなさい。はい，どうぞ。

生徒：アンダーラインを引いてもいいですか？

Ito 先生：悪いけど，それはだめ。皆で使う資料だから，アンダーラインは禁止です。じゃあ，書いてください——写すんじゃなくて，簡単にまとめて。ざっと箇条書きにしてください。5分あげますから，自分の分をして。何か質問は？

【皆いっせいに喋り，聞きとれず。】

Ito 先生：皆さん，5分ですよ。もう1分経ったから，あと4分です。彼らが王になるべきだと考えた理由を見つけること……。

【皆いっせいに喋り，聞きとれず】

生徒：先生，友達も書かないといけないんだから，自分のを見せてあげないといけませんか？

【皆いっせいに喋り，聞きとれず】

Ito 先生：いいえ，わかったことをまず自分でリストにしてから，それをお友達に話さない。


【皆いっせいに喋り，聞きとれず】

Ito 先生：あと3分です。皆さん，わかったことを友達に話す前に……。

【先生が教室に明かりをつける】

Ito 先生：あと2分。

Harald Hardrada




Harald Hardrada was the strong Viking King of Norway. He was a tremendous warrior, and had travelled across and beyond Europe. He felt that he had a right to be King of England as he was related to King Cnut and his son who ruled England as well as Norway and Denmark from 1016 to 1042, until the English Edward the Confessor seized the throne.

There were many people from Viking families who had settled in the north of England since the 860s and Harald believed that they would help him invade England.

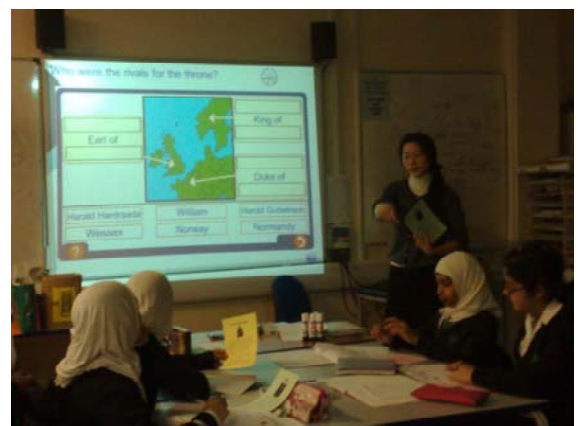
Harald also had the help of Tostig, Harold Godwinson's brother who had been banished from England in 1065 and who wanted to get his lands back.

William
Duke of Normandy



William was a good warrior and belonged to a powerful family in Normandy (France). When the Viking King Cnut invaded England in 1016, Edward the Confessor, who was then a young boy, fled to Normandy for protection and William's family helped him. Edward stayed there until 1042, when he became King of England.

William claimed that Edward had promised him the throne in 1051 after he sent troops to England to help Edward fight Earl Godwinson (Harold's father). According to Norman sources, Edward, just before his death, sent Harold Godwinson to William to confirm his promise of the throne by an oath, and when they came together, Harold swore loyalty to William.



《25:00 経過》

Ito 先生：いいですか、皆さん、ちゃんと聞いて。あと 10 秒で仕上げてください。

Ito 先生：よろしい。さあ、静かにして。3, 2, 1 ——はい、ペンを置いて。【教室中、静かになる】皆さん、ペンを置いてください、そこの机の人——きちんとして。今からやってほしいのは、わかったことをお互いに伝えることです。じゃあ、グループのほかの人たちはあなたのカードのことは何も知らないのだから、皆が書いたことを合わせなさい。今やるべきことについて、カード全体を読まないといけなかもしれませんね。自分のグループの人たちと話し合っ



Ito 先生：主な理由を箇条書きにしてください。だから、注意して聞いて——お互いのノートを写すんじゃなくて——よく聞いて書きなさい。じゃあ、えーと、7～8分あげます。さあ、始めて。《30:00 経過》

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：あと 4 分です。

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：あと 3 分。

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：はい、皆さん、あと 2 分ですよ。もう終わったか、ほぼ終わったグループは？ほとんどできた？ さすがね。あともう少し？……ほぼ終わり？……あともう少し？ よろしい。はい、あと 1 分半……。

《35:00 経過》

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：はい、あと 1 分です。さあ、さあ……さあ急いで。あと 1 分ですよ。

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

【スライド変わる。見出し 1 行+2 行の文言のスライド】

Ito 先生：いいですか、あと 5 秒。さあ、書くのを止めて。そう、3, 2, 1。ストップ、話すのを止めてペンを置いてください。正面を向きましょう。さて、いろんなことがわかりましたか？

生徒たち：えーと、いいえ。

Ito 先生：どの人も「自分が次の王になるべきだ」と考えた理由がわかりましたか？

生徒たち：はい。

Ito 先生：よろしい。じゃあ、その理由を 1 つ説明してくれませんか……誰についてやったの？

生徒：私たちは 3 人全員についてやりました。

Ito 先生：でもどの人が王様になるべきだと思いましたか？

生徒：ウィリアムです。

Ito 先生：ウィリアムがなぜ自分が王位を継承すべきだと思ったのか、その理由を 1 つあげてくれますか？

生徒：それは、ハラルド・ハルドラーダは、彼はものすごく強い戦士で、そして彼は……。

Ito 先生：あなたは、「ウィリアムと思う」と言ったでしょう。ハラルド・ハルドラーダとウィリアムのどっちをやりましたか？

生徒：ハラルド・ハルドラーダです。

Ito 先生：はい、じゃあ、なぜ彼は自分が王位を継ぐべきだと思ったのか、理由を 1 つあげてください。

生徒：それは、彼がクヌート王の親類で、彼の息子がイングランドの支配者だったからです。

Ito 先生：それは彼（ハラルド）の息子ではなくて——先祖ですね。クヌート王とその息子は、もともと北欧諸



国、北ヨーロッパの出身で、イングランドを支配していました。そこで、ハラルド・ハルドラーダは、「そうだ、自分の祖先がイングランドを支配していたのなら、自分が次のイングランド王になれないわけはないだろう？」と考えたのです。それが彼の主張の 1 つですね。では、ウィリアムはどうでしょう？ 彼の理由は何ですか？

【回答の音が小さいため、聞きとれず】

Ito 先生：よくできました。じゃあ、そこで止めて—— 2 つの理由ですね——彼が立派な戦士だったことと強い国の出身だったことね。聞いていますか？

生徒：はい。

Ito 先生：笑ってちゃだめですよ。さあ、ここに 2 つの異なった理由があります。それでは、王様はどうして立派な戦士であるべきなの？ 立派な戦士は立派な王様になれますか？

生徒たち：はい。

生徒 (ジェニファー)：いいえ。

Ito 先生：なぜ？ ジェニファー。

ジェニファー：それは、国を守るために他の国の国民と戦う必要があったからです。

Ito 先生：国を守るため？ そうです。つまり、11 世紀の人々は、国王たるもの、強く——肉体的に力が強く——闘いが上手であるべき、戦闘において優れた能力を備えているべきと考えていました。それによって自分の国民と国を守ることができたのです。だから、それが大きな理由の 1 つですね。あなたが言ったもう 1 つの理由は、彼が大国の出身だからでしたね。じゃあ、どこの出身ですか？ 彼はどこの国の出身でしょう？

生徒：フランスです。

Ito 先生：ウィリアム・ノルマンディーのことですね。

生徒：ノルウェーです。

Ito 先生：はい、そうですね——ノルウェー？……ノルウェーではなくてノルマンディーですよ。ですから、それはフランスの一部です。そうして彼は、自分はイングランドの土地を要求し王様になるのにふさわしいくらい強いと考えたわけです。

生徒：もう 1 つ理由があります。彼は、エドワード王から王位継承の約束をもらっていたんです。

Ito 先生：そうですね。実際エドワードは——いま王様は亡くなったところですが——彼は本当に「さあ、お前が次の王になるのだ」と約束したのです。でも、もう 1 人、同じ主張をした人物がいましたね。「しかしエドワード王は私が王になってよいと本当に約束したのだ……」と言ったのは、ほかの誰でしたか？

生徒たち：ウィリアムです。

生徒：ハロルド・ゴドウィンソンです。

Ito 先生：そう。ハロルド・ゴドウィンソンとそれから？

生徒たち：ウィリアム。

Ito 先生：そうですね。だから、同じ理由を持っている人物が 2 人いたわけです。このように、エドワードが言ったことはひどく紛らわしいもので、2 人とも「いや、自分が約束をもらったのだ」と考えたのです。3 人の主張で良く似たものがほかにもありますか？

生徒：ハロルド・ゴドウィンソンとウィリアムはどちらも有力な家柄です。

Ito 先生：そう、2 人は名門の出身で、3 人のうちの 1 人は——実際あるところの王様でしたね？ それは誰でしょう？ この 1 人はすでに経験を積んでいたのです……。

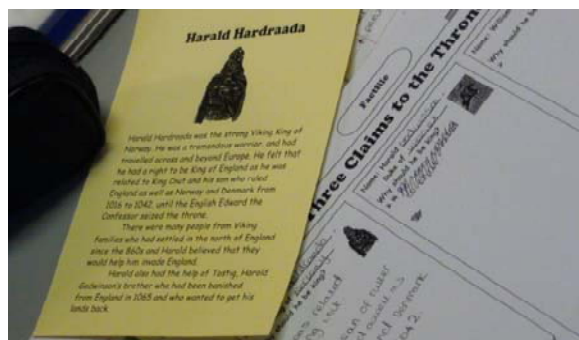
生徒：ハラルド・ハルドラーダです。

Ito 先生：ハラルド・ハルドラーダ。そうですね。つまり、1 人は……自分がすでに王様で、国を治める経験をたっぷり持っていたので、良い王様になれると考えたのです。「そう、なぜ駄目なんだ？ 国をもう 1 つ治めることができないはずがない」と。

生徒：でも、それでは国を 2 つ支配することになります。

《41:00 経過》

Ito 先生：そうですね。それは問題ありませんよ。もっと力をつけて、もっとたくさんの土地を手に入れることもで



きるんです。クリスマス前の前回の授業で、ヨーロッパのいろんな国の多くの人々がイングランドに引きつけられた理由を話しましたね。蜂蜜や銀のような産物のおかげで……。

生徒：毛織物。

Ito 先生：はい。そういう製品です。それから、人々が時には違った国に移住したくなる 4 つの理由を思い出してみよう——ヨーロッパ人のある集団が、なぜイングランドに来ることを望んだのか、その主な理由は何でしたか？ なぜ？

【生徒たち答えるが、聞き取れず】

Ito 先生：その人たちは母国で、ある問題を抱えていました。どんな問題がありましたか？

生徒：爆撃。

Ito 先生：爆撃。いいえ、戦争のことを言っているのではありません。第二次世界大戦とかそういったことを話しているんじゃないですよ。あなたが話をしているのは【よく聞き取れず】。11 世紀のイングランドはどうでしたか？ 千年前に、ヨーロッパ人のさまざまな集団がイングランドに来たがったのです。

生徒：自分の国が嫌いだったから。

Ito 先生：ちがいます。

生徒：国境を広げたかった、とか。

Ito 先生：国境を拡張したかった、つまりもっと領土が欲しかったんですね。なぜもっと領土が欲しかったのでしょうか？ どうして自分の国に留まることができなかったのでしょうか？ オランダ人やポーランド人は、とくに自分たちの土地に問題を抱えていました。

生徒：それは水ですか？

Ito 先生：水位が上昇して、そのため彼らの土地が縮小しました。だから、どこかもっと安全で広いところをさがす必要があったんです。

生徒：なぜフランスに行きたがったんですか？ どうしてその人たちは私たちにフランス語を覚えさせようとしなかったのですか【よく聞き取れず】？

Ito 先生：そう。そこが歴史のおもしろいところですね。ええ、もしその時、フランス人が国を治めていたら、私たちはフランス語を話していたでしょうね。

生徒：彼らはすごくいい人たちなんですか？

Ito 先生：スピタルフィールズについて話す【訳注：ロンドンのイーストエンドにある地名。常設市場「オールド・スピタルフィールズ・マーケット」で有名。ここでの使われ方は、何かの言い回しの一種かもしれない】のはその位にしましょう。それでは、次回の授業ですが、あなた達にやってもらうのは——すでに 3 人の人物について学んだわけですから。この知識を使って、説得力があるスピーチをやってください。「説得力がある」の意味はわかりますか？

生徒：宿題ですか？

Ito 先生：いいえ、宿題ではありません。今日は宿題なしです。

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：何かに投票させることですか？ 投票させるだけ？

【皆いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：ちょっと——誰が話しているの？ 静かに。いいですか、説得力があるスピーチというのは、みんなにその通りだと思わせるスピーチ、あなたがみんなに信じて欲しいことを信じさせるスピーチです。ですから、あなたたちに話してもらうのは……この人たちの誰が次の王様になるべきか選んでもらいます。そして、とことん主張して、うまく説得しなければならぬのです。そう、それが次回の授業でやることです。そういうことで、今日はここまで。

【生徒たち、席を立ち始める。いっせいに喋り、聞きとれず】

Ito 先生：そうそう、皆さん、カードを全部集めてくれますか？ 机の中央に置いてください。

【カードが集められ、皆帰り支度につく】

【授業が終了し、皆荷物を片付けて教室から出てゆく】

《46:00 経過》



Three Claims to the Throne

Name: Harald Hafdrada,
King of Norway

Why should he be king?

He was related to King Canute.



and his son of ruler of England as well as Norway and Denmark from 1016 to 1042.

He was a tremendous warrior.

Name: Harold Godwinson,
Duke of Wessex

Why should he be king?

> He was related to King Canute.



King Edward promised Harold that he would be next to the throne.

as well as that Edward was Harold's brother-in-law.

Belonged to most powerful family in England.

Name: William - Duke of Normandy

Why should he be king?

> He was a good warrior and belonged to a powerful family in England.



King Edward promised William that he would claim the throne in 1051.

King Edward went to Normandy for protection and his family helped him. He stayed until 1042, when he became king of England.

(1) プレゼンテーション資料⁽²⁾

Starter(5mins):

Step 1-Identify 3 things in the picture

Step 2-What do you think is happening in the picture?

(Any guesses can you make?)



はじめに(5分):

ステップ1-絵の中に書かれていることを3つ挙げる。

ステップ2-絵の中で何が起きていると思うか。

(どんなことを推測しますか?)



Three Men and a Crown

Part 1 - The reasons for their claims

Learning objectives:

- To understand why 1066 was a year of crisis.
- To identify three people who had claims to the English throne in 1066 and explain the reasons for their claims.



三人の男と一つの王冠

パート1- 彼らの要求の理由

学習目標:

- 1066年が危機の年であった理由を理解する。
- 1066年にイギリスの王冠を要求した3人を挙げ、彼らの要求の理由を説明する。



Why was 1066 a year of crisis?

At the start of 1066, King Edward the Confessor was a sick old man. He would not live long.

Who would be the next king?

This would not normally be a problem – it would go to his son. However, Edward had no son!

Edward dies and no one knows who is the rightful heir – this could spell trouble!

At this time kings were normally elected by the most powerful English nobles called the Witan. If a strong king had a suitable son, then the son was likely to be elected. If not the Witan choose the strongest person with a claim to the throne...



なぜ1066年は危機の年だったのか?

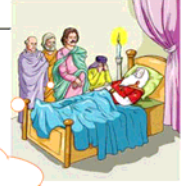
1066年初め、エドワード懺悔王は年老いて病気になっていました。彼はもう死を迎えるところです。

次の王には誰がなるのか?

普通は息子が王位を継ぐので問題になるようなことはありません。しかし、エドワードには息子がいませんでした!

エドワード王は亡くなり、誰が正統な後継ぎなのか誰も分かりません。-これはトラブルの兆しです!

当時、王は普通は「ウィタン」と呼ばれる有力なイングランドの貴族たちによって選ばれていました。強い権力を持った王に適当な息子がいればその息子が選ばれることが多い。もし、そうでなければ、ウィタンは王位に最もふさわしい人物を選ぶことになります。



Who were the rivals for the throne?

King of

Earl of

Duke of

Harald Hardrada William Harold Godwinson

Wessex Norway Normandy

王位を主張するのは誰か?

King of

Earl of

Duke of

Harald Hardrada William Harold Godwinson

Wessex Norway Normandy

Your task

- 1, Work in groups of three.
- 2, You're given a set of three cards which give you information about the three men who had claims to the throne. You need to read a card each and fill in your factfile sheet.
- 3, Once you finish filling in your section, share your findings with the rest of your group so that you can complete the whole factfile sheet.

作業

- 1, 3人のグループで作業して下さい。
- 2, 王位を主張した3人についての情報が書かれた3枚のカードをあなたの方に渡します。各自1枚ずつカードを読んで、プリントの空欄を埋めなさい。
- 3, 自分の部分を埋め終わったら、グループの他の2人と分かったことを共有し、プリント全体を埋めなさい。

Plenary

Can you identify any differences between their claims?

全員で

3人が要求したことの違いについて挙げることができますか?

(2) 配付資料

William

Duke of Normandy



William was a good warrior and belonged to a powerful family in Normandy (France). When the Viking King Cnut invaded England in 1016, Edward the Confessor, who was then a young boy, fled to Normandy for protection and William's family helped him. Edward stayed there until 1042, when he became King of England.

William claimed that Edward had promised him the throne in 1051 after he sent troops to England to help Edward fight Earl Godwinson (Harold's father). According to Norman sources, Edward, just before his death, sent Harold Godwinson to William to confirm his promise of the throne by an oath, and when they came together, Harold swore loyalty to William.

Harold Godwinson

The Earl of Wessex



Harold Godwinson belonged to the most powerful family in England. They already controlled Wessex, but had ambitions to rule England. He is a good warrior and believed that England needed a strong ruler after Edward. In 1051, Harold and his father rebelled against King Edward, but were defeated and driven from the country. Harold returned the next year and soon became the most powerful nobleman in England.

He thought he had the best claim to the throne because he was Edward's brother-in-law (His sister Edith was married to Edward). He claimed that Edward had promised him the throne just before he died. Harold was also the only Englishman claiming the throne.




Harald Hardraada



Harald Hardraada was the strong Viking King of Norway. He was a tremendous warrior, and had travelled across and beyond Europe. He felt that he had a right to be King of England as he was related to King Cnut and his son who ruled England as well as Norway and Denmark from 1016 to 1042, until the English Edward the Confessor seized the throne.

There were many people from Viking families who had settled in the north of England since the 860s and Harald believed that they would help him invade England.

Harald also had the help of Tostig, Harold Godwinson's brother who had been banished from England in 1065 and who wanted to get his lands back.

Factfile		
Three Claims to the Throne		
Name: Harold _____ King of _____ Why should he be king? 	Name: Harold _____ Duke of _____ Why should he be king? 	Name: William - Duke of _____ Why should he be king? 

2. 授業者へのインタビュー (2011.1.6 授業後)

Q 1 : ナショナルカリキュラムの変更によって授業は変わりましたか？

A 1 : ナショナルカリキュラムの変更によって、本校のカリキュラム自体も少し改編がありました。歴史の授業で教えなきゃいけないコンセプトは変わっていないのですが、これに加えて、今は、例えば、「歴史的重要性 (history significance)」とか、文化・宗教・封建制の中での階級・人種といった様々な面での「多様性/相違性 (diversity)」といったことを教えなければいけなくなりました。この世界にはいろんな民族がいて、そこに紛争があります。例えば、第9学年のトピックだと、市民権運動 (アメリカの黒人市民権運動) というのがあり、どうやってこの世の中が、多種多様な宗教と文化と絡み合っただのか、というのがテーマにないといけないのです。つまり、なぜこのトピックを選んだかについての理由付けをいちいちしていかなければいけないのです。ただ、今日の授業 (採取授業 ; Three Claims to the Throne の授業を指す) は、1066年というと大体どの学校も教えるトピックになっていますので、結構スタンダードなものでした。

小学校だとエジプトの文明をやったりとか、ローマ時代をやったりとかします。でも、小学校の歴史教育というのは、「物語を読む」という感覚なんですね。情報を伝達するだけで、あまり探究はしない。もちろん小学校でもちょっとリサーチしたりとか、博物館に行って何か調査したりとかしたと思うのですが、基本的には「物語を読む」感覚。それが、今日の授業の第7学年になってくると、だんだん探究していくようになり、史資料の読解なども入ってきます。それがたぶん大きな違いなのかなと思っています。とりわけ、近年「歴史的技能 (Historical skills)」を念頭においた授業作りに焦点があてられるようになってきているので、第7学年でも理解度の既に高い生徒には史料の歴史的信憑性、歴史的記述の裏にある筆者の意図などをグループで話し合わせたりすることもあります。

私自身、日本で育って、日本の教育を受けてきたので、日英の歴史教育の一番の大きな違いはやっぱり、「自分で考えなければいけない、そして、自分で史資料を見て、何を私たちに伝えてくれるか」を考えるとこです。例えば、今日の授業で私が導入で使ったバイユーのタペストリーですが、あれを見て、それが何を伝えてくれるのか。本当はもうちょっと高度になり、第9学年ぐらいになると、あのタペストリーを使って、「これはどのくらい歴史的信憑性があるか」「どのくらい歴史的真相を私たちに伝えてくれる

か」というところまで扱わなければいけない。ただ、今日は第7学年なので、絵とかをまず情報として受け入れるというステップから入りました。

Q2：こういうカード（右図参照）はそれぞれの先生が作っているのですか？

A2：この資料は私が作りましたが、ただ内容についてはいろんな教科書から引っ張ってきたり、いろんなところから使っています。でないと白紙状態から作る時間はないので。

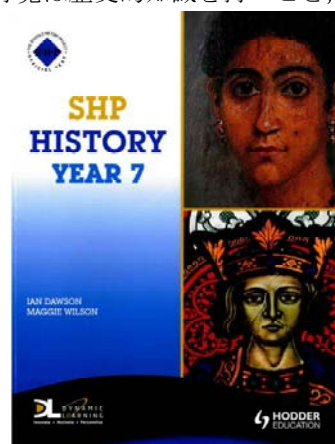
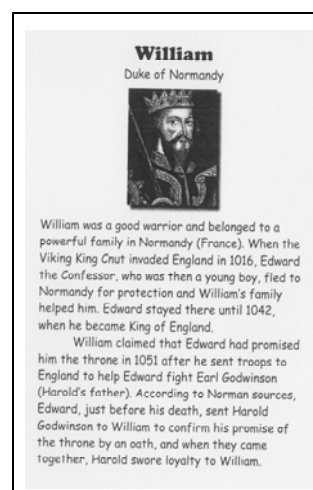
イギリスは教科書が充実していて、いわゆる検定教科書というのはいりません。その代わりに、いろんな出版社が出版していて、私は SHP (the School History Project)⁽³⁾ の教科書が一番好きです。というのも情報だけでなく、スキルを学ばせるようなレイアウトになっているからです。もっとも、大体どの教科書にも必ずソースが入っていて、それは多分、「地理」でも一緒だと思うのです。

ただ、本校の場合はあまり教科書というものは授業で使わないようにしています。教科書はソースとして、情報として使って、タスク自体は私たちが考えたり、あとは教科書等から、ちょっとアイデアをもらったりしています。

イギリスの歴史教育は基本的にあまりビッシリ編年的にはやりません。とにかく時間が足りません。もともと歴史は2週間で150分授業時間が与えられていましたが、削られてしまって、今は100分なので。だから1週間に50分授業が1回しかなかったのです。

ただし、今、保守党主導（保守党と自民党の連立政権）の政府になって、保守党は歴史教育が大好きなので、1月以降、KS3 (Key Stage 3) での授業数不足、それによる GCSE⁽⁴⁾ レベルでの生徒の学力低下、理解力・スキル不足の懸念を理由に、カリキュラムの改変がおこなわれました。その為、9月以降は第9年生のみですが、以前のように2週間で150分の授業となりました。元来、保守党は歴史的知識を持つこと、必要な思考力・表現力を発達させることを重要視しており、トップレベルに位置する主要大学への入学には歴史または地理の学習が重要という考えを明らかにしています。歴史教科も学校評価の判断基準に含めることにしました。もちろん、シティズンシップ (Citizenship) 育成のために歴史教育を使いたいという理由もあるでしょう。

ただ、この動きに対しては、知識をより重視した授業に変えようとするのではないかと、というのが私たち歴史教師の懸念材料になっています。もちろん、バランスは大切だと思いますから、知識を伝えることも大切ですし、歴史的なスキル、史資料の使い方、エッセイの書き方、ディベートの仕方とか教えることも大切だと思っています。その意味で、このホダー・エディケーション社の SHP の教科書は、今、私が一番使っている、一番おもしろい教科書です。



Q3：イギリスでは、日本のように編年的な学習になっておらず、テーマを教師がそれぞれに選ぶと、扱う内容に偏りがでるのではないかとと思いますが、それで良いと思うのでしょうか？

A3：それでも良いのです。基本的な考え方は、乗り物があるとしたら知識は乗り物に乗っているものなのですが、その乗り物自体は、例えば考え方、史資料の使い方、そういったスキルなのです。

イギリスでは、必修としては第9学年までしか歴史を学びません。第10学年になると選択制になってしまう。早い段階でそうになってしまうので、日本人の場合だと「源頼朝」や「徳川家康」の名前は一応みんな知っているのに、私のイギリス人の友人はそのレベルの名前すら危うい人がいる。何がどの時代に起こったのか、という大きなピクチャーがない人がたまにいる。このことについては、今、新たに出てきているコンセプトが「ビッグピクチャー (big picture)」というコンセプトで、編年史に弱いイギリスの子どもをどうやってカバーしてあげるか、なかなか授業内では全部のイベントをカバーしきれないものをカバーする工夫です。例えば、SHP が大好きなトピックが「メディスン・スルー・タイム (medicine through time)」といって、医学の歴史をどうやって発展してきたかを、大きなピクチャーにいれて学ぶ、いわゆるテーマ史みたいな感じです。それによって、紀元前からスタートして21世紀までをテーマを決めてカバーする試みをしています。今、私がこのトピックについての授業をプランニングするにあたって念頭に

おいているテーマが「ヒューマンライツ」です。人種問題、奴隷問題など、今でも強制労働とかの問題が世界各地にあります。特にこの子たちは親と祖父母の世代にイギリスに渡ってきた人が多いので、奴隷制度、黒人差別の問題などに興味を持っている子が多い。彼女たちには身近な問題でしょう。

Q 4 : 移民の方のコミュニティが近くにあるのですか？

A 4 : そうです。イーストロンドン、ホワイトチャペル、そしてポーといったエリアにはアジア人が多いのです。本校は特にバングラディッシュからの人が大変多い地域なのですが、そういう関係もあって、なるべく彼女たちが興味を持てるトピックが大事です。歴史というのはただ本に書かれているもので、「過去にあったことだから私たちには関係ない、つまらない」と思ってしまう子どもも少なくありません。情報化社会・技術社会に生まれた子供たちには、過去を考察すること、今、そして未来とのつながりを見ることの面白さ、大切さを見出せない子供がたくさんいます。過去がなければ私たちも未来も無いこと、単純ですが今しか見ていない子供たちには気づきにくいことなんです。その探究の面白さを伝えていければ良いなといつも思っています。

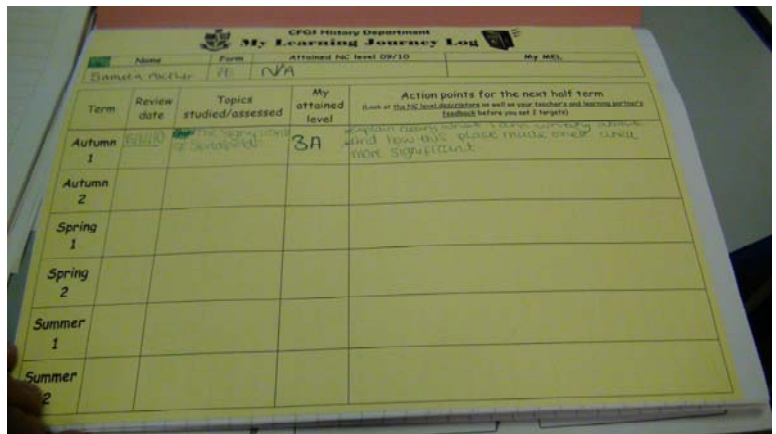
だからこそ、私たちは、なるべく良いトピックを探します。だから、第7学年では、最初に「地域史」をやりました。スピタルフィールズ (Spitalfields) という地域がこの近くにあるのですが、そこはすごくおもしろい地域で、17世紀くらいにまず、フランスからの移民が入ってきた場所であり、その次にユダヤ人とかアイリッシュなど、違う民族たちが集まった人種のるつぼ的な地域でした。今はアジア、特にバングラディッシュ系の人たちが、多く住む地域で、移民の移り変わりを授業で扱ったりしました。

Q 5 : 資料として頂いたMy Learning Journey Log (右図参照) とは何ですか？

A 5 : 今年私たちが、スタートした試みです。私が勝手に名付けましたが、「ラーニング・ジャーニ・ログ (Learning Journey Log)」といって、子どもたちが自分自身でどのくらいのレベルにいるのか記すものです。

「レベル」という言葉を使うのは嫌ですが、子どものスキルと知識の量を一つのレベルで評価するというのはすごく難しい。ただ、評価は出さなければいけないので、彼女たちになるべく、自分にどんなスキルが備わっているか、どのへんが私のウィークポイントなのか、何が欠点でもっと学ばなければいけない部分なのか、ということに分からせるために、子どもたちはこれを記録していかなければいけない。こういうのがオフステッド

(Ofsted)⁽⁵⁾は、非常に好きなのです。オフステッドが何を学校でするかという、私たち教師に質問せず、子どもに質問します。「あなたはどのレベルにいると思うの?」「レベル5ならば、次のレベル6に行くには何をしたらいいと思う?」という質問を子どもに投げかけます。私たちもそれに向けて、彼女たちを訓練しなければいけない、というジレンマがあります。自分で自分の学習を評価するというのはわりと新しいコンセプトなので、今の第10学年、第11学年だともうあまり生徒にも親しみが無いのですが、第9学年からは小学校の時期からやられている子が多いのです。



CFGS History Department My Learning Journey Log				
Name	Form	Attained NC level 09/10	My MEL	
Term	Review date	Topics studied/assessed	My attained level	Action points for the next half term <small>(Look at the NC level descriptors as well as your teacher's and learning partner's feedback before you set 2 targets)</small>
Autumn 1			3A	
Autumn 2				
Spring 1				
Spring 2				
Summer 1				
Summer 2				

現在の新しい試みとして、私は緑のペンで、「グリーン・ペニング (Green penning) するよ」というと彼女たちが自分のやった学習を自分で評価する時間になっています。私は「トラフィック・ライト (Traffic lights)」（下図参照）というシステムを使いますが、信号機の三色に模して、緑は「私はこのトピックについては理解できた」から「これ以上やる必要はない」という場合は G と記させ、黄色は「やったのだけど、もう少しできた」「自分でいろいろ考えて書けるはずだが、まだその能力が欠けている」という評価を自分でさせるようにします。

つまり、採点のための記号を使って、自分やクラスメートの書いた文章を分析させ、評価させる取り組みです。元来は教師がスペルをなおしたり、コメントを書いたりして添削をするものですが、それを子供にやらせてみようというわけです。歴史では特に文章力が問われます。知識を持っていても、それを表現する力が無くては

良い成績は取れないのです。GCSE レベルになってくると、解答はすべて記述形式で、点数の大きな問題ですと与えられた時間内で2ページくらいの文章を書かなければなりません。自分では伝わっていると思っていても、読む側が理解できなければ意味がありませんから、早いうちから訓練することが必要となってくるわけです。特に本校では簡単な文章を書くにも苦労する子供たちがたくさんいます。歴史科だけではなく、他の学科でも大きな課題となっている部分です。

ただ生徒自身の評価と私の評価がマッチするか、という問題があります。例えば、私がレベル7をあげたのに彼女たちは自信がなくレベル4だと思っている子

もいれば、レベル8を必ずもらえると思っていたのに、評価はレベル6だったりする。そのギャップを埋めなければなりません、それにはまだ時間がかかります。

ここ数年、この国では、いわゆる「アセスメント・フォー・ラーニング (AFL)」というコンセプトが重要になってきています。それは歴史だけではなく、あらゆる教科で大切になっています。それは子ども

Year 7 History Unit 2 East London and Me - Essay assessment
What made Spitalfields significant?
Name: _____ Form: _____

	Assessment Criteria	Traffic lights
1	I can NAME more than 2 (ethnic/religious) groups of people who moved to Spitalfields (Level 3).	
2	I can tell the CHRONOLOGICAL order in which they moved to Spitalfields. I can also provide the dates/periods (Level 3).	
3	I can EXPLAIN the reasons why they moved to Spitalfields using my knowledge and research outcomes as EVIDENCE (Level 4/5).	
4	I can use a variety of CONNECTIVES to link sentences and paragraphs and develop my explanation (Level 4/5).	
5	I can clearly EXPLAIN why Spitalfields was significant to many people in the past (Level 5).	
6	I can ANALYSE and EXPLAIN how the immigration changes have affected peoples' lives and shaped the area today (Level 6).	
7	I can identify some LINKS (i.e. similarities) between the reasons why the different immigration groups came to Spitalfields (Level 6).	
8	I can gather various sources of information for myself and carry out research and use the information critically in my essay (Level 7/8)	

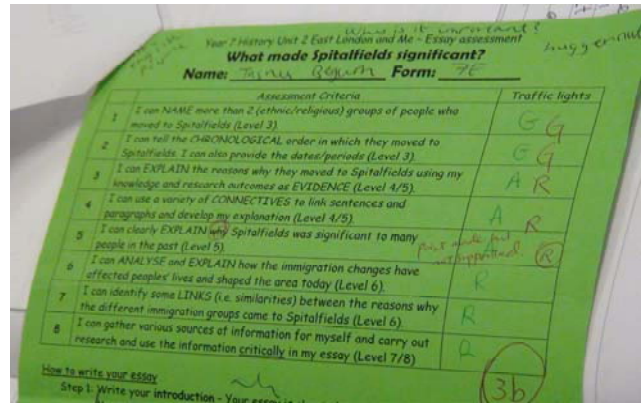
How to write your essay

Step 1: Write your introduction - Your essay is about the significance of Spitalfields.
 Many people believe that the area is significant because it has been home to lots of immigrants from different parts of the world. In this essay, you need to prove this by discussing the different immigrants groups who moved to the area and explaining their motives.
 e.g. This essay will discuss...

Step 2: Write the main body of your essay - Each paragraph should have the PEEL structure
Point - Your main argument point (Who immigrated?)
 e.g. One of the groups who moved to the Spitalfields area was...
Evidence - Use historical facts/statistics to support your point. (e.g. When did they move to the area? From which country? Large-scale immigration? What was Spitalfields like when they immigrated?, etc.)
 e.g. In the mid-1800s, a potato famine hit Ireland...
Explanation - How can you tell that the area was important to those immigrants?
 Use phrases such as this suggests that, this meant that, this resulted in/from, this led to... etc.
 e.g. This led to Irish people moving to the Spitalfields because...
Link - Use connectives to link sentences and paragraphs, and develop your explanation. E.g. Firstly, also, moreover, in addition, as a result, etc.

Step 3: Write your conclusion - Again, refer to the question (What made Spitalfields significant?). Summarise your main points and say how and why the Spitalfields area has been significant to many people throughout history.
 e.g. In conclusion, it is my view that...

たち自身が「自分たちが何を学んでいるか」「何の目的でか」「どんなスキルを学ばされているか」について自分たちで知っていなければならないということです。それを知って自分でアセスメントを理解することによって、次のレベルに行ける、という考え方です。



Q 6 : 議論の仕方, エッセイの書き方, 主張の述べ方, 質問の仕方などには, ある程度, 形式化されたものがあるのですか? それをきっちり指導されていますか?

A 6 : 「パースウェイシブ・スピーチ (Persuasive speech ; 説得力のあるスピーチ)」という, 次の授業でやる

課題は, この学校の読み書きの問題を解決するための専門のスタッフがいます, 彼女と一緒にプランニングしました. この学校には, アイデアはあるが, それをうまく伝えられない子が多い. それをどうやってトレーニングしてあげるか, という意識で彼女と二人で作った授業なのです.

エッセイにすることもできるし, クラスディスカッションで, グループに分けてディベートすることもできるし, いろんな形でできるのですが, 最終的には彼女たちが自分で議論していかなければいけない. それ

が歴史的にどのくらい正しいか, 彼女たちの知識は危ういけれども, でも歴史は作るもの, 自分たちで理解して, 自分たちで分析して, 議論して作っていく. 今の日本の歴史教育がどうなっているか, 私にはわかりませんが, 教科書に書かれている通り「これが起こりました」「これが歴史的事実です」では終わってはいけません. 例

The Clarkson Challenge: Stop the slave trade! - Delivering a persuasive speech -

Speech planning/outline sheet

Introduction - Powerful opening paragraph!

Main Body - Defeat as many of the arguments put forward to defend slavery as possible!

Remember PEEL!

Argument point 1 (Paragraph 1)

Point (Which of your enemy's argument do you want to defeat? What's your counter-argument?) -

•

Evidence (Support your counter-argument with evidence e.g. specific examples and to quote from key witnesses)-

•

Explanation (Develop your main point by using phrases such as 'this means that' 'this suggests that' Remember to use different persuasive techniques!)

•

Link (use connectives to link to your next point!)

Argument point 2 (Paragraph 2)

Point -

Evidence -

Explanation -

Link (use connectives to link to your next point!)

Argument point 3 (Paragraph 3)

Point -

Evidence -

Explanation -

Link (use connectives to link to your next point!)

Conclusion - End with an emotional plea! Use a dramatic sentence that your audience will remember.

えば、広島に原爆が落とされた問題について、アメリカの見方はどうなのだろう。落としたことについて、どうやって正当化しようとしているのかなど、いろんなトピックを使ってできる。それは生徒も好きなのです。

そこで、私たち歴史科の教員は、英語科もそうですが、「ピール(PEEL)」という言葉をよく使います。Pはポイント。ひとつのパラグラフにまず主題を明らかにしなければならない。例えば論文を書くときにこのパラグラフは何について述べているか。ここで論拠を述べられなければならない。歴史の場合は、史資料をここで使わなければいけない。この資料(前頁図参照)の場合はなぜ奴隷制は廃止されるべきなのか。奴隷制を廃止すべきなのか?というスピーチですが、その根拠は何か?例えば トマス・クラークソン(Thomas Clarkson)の資料では、「奴隷はこのように扱われていて、彼らの生活の状況はあまりにも酷い。これは人権に反するものだ」とか資料を引き出してきて、自分の議論をサポートしなければならない。その史資料を使って自分で説明する、なぜ私の議論が正しいのか。最終的になぜそれがメインのテーマに関わってくるのか。なぜ奴隷制は廃止されるべきなのか。このパラグラフで述べた論点が次にどうつながるのか?「ちゃんとピールしてね」というと彼女たちはわかるようになります。

もちろん、彼女たちの読み書き能力にバラつきがあるので、「なんだこれは」というものもたまにあります。構造が何もない文章、史資料を使っていない。とにかく自分の考え満載で、それはそれですごいのですが。とにかく歴史の授業なので史資料を使わなければいけないと教えています。

Q 7 : これ(前頁図)は生徒にとっては、スピーチやエッセイの作り方のフォーマットだと思いますが、評価の際には、これらの中で、特にどの点についてチェックするのですか?

A 7 : そうですね。「説明(explanation)」と「証拠(evidence)」ですね。歴史の授業の評価ですので、例えばスペルミスが10個あったからといって、段階がひとつ下がるのかということ、それに関しては、私は下げません。英語の授業ではないですからね。

Q 8 : つまり、少なくとも「証拠」がきちり示され、それに基づく「説明」がなされている、ということが大変重要な評価の基準になるというわけですね。

A 8 : はい。やはりレベル7,8ぐらいになってくると、史資料に対して「なぜこの史資料は有用性があるのか」「目撃者の証言の資料は一体どのくらい信憑性があるのか」「それがどのくらい私たちの歴史的な議論を助けてくれるのか」くらいのところまで触れていなければならない。「これは誰が書いた資料で、この人はどういう立場の人で」。ただ、それ以上いくとやっぱりGCSEではAレベルになってしまう。大学レベルの授業になってくる。「この人は共産主義者だから、こういうものを書いた。だからこの人が明らかにしている議論はどのくらい歴史的このイベントを理解するにあたって、気を付けて使っているものなのか」ということをもっとはっきり議論していくのはAレベルだと思うのです。

Q 9 : 今日の授業(採取授業)では、例えば、3枚のカードに書かれていることは本当に事実なのか、誰がどんな意図でこのデータを出しているのか、というのを議論することもできたのではないのでしょうか。

A 9 : できたと思います。しかし、今日の授業はあくまで情報元としてカードを使うことが前提となりました。ただ、史資料の信憑性のようなものを扱う授業も実際には行っています。その場合は、クリティカルな読みをしていかなければならないことになります。例えば、この私がよく使う資料、SHPから私が学んだ手法なのですが、これは「エビデンス・フレーム(evidence frame)」(次頁図参照)と言いまして、真ん中に史資料を置いて、まずは、私が今日の授業(採取授業)のスターターでやったのと同じなのですが、中心の枠で、まずは何が書かれているのかしっかり見てみよう。「描写(describe)」してみよう。次の枠では「推論(inference)」といって、この裏に隠されているメッセージは何なのか、何を言いたいのか、ということを考えさせ、一番大きな枠では、そこからどんな質問ができるか。この資料は何を伝えてこないのか考えて見よう。「制約(limitation)」と私は言いますが、資料はは奴隷制のすべてを伝えてくれるわけではない。だからこの段階で、何のための書かれたのか、誰がプロデュースしたのか考えて見よう。といったことを行います。実際、中央にある絵は奴隷制に反対している人たちが作ったものです。奴隷制のネガティブなイメージを出そうとしているものです。鎖に繋がれた人が「自由にしてください。私も人類、人間の一人です」というメッセージが隠されていますね。できる子は「これは奴隷制を廃止したいから、一般の人たちにこういうものを見てもらって、罪悪感を抱かせるキャンペーンに使われたものだ」

Step 3: What does this source NOT tell you? Can you devise any question?

Step 2: What can you infer from the source? (What does each part of the source try to tell you? Why was this made? Who made it? What guesses can you make?, etc.)

Step 1: What can you identify in the source? Describe or label the source.




というところまで到達できるのです。例えば、全ての奴隷がこういう扱いを受けていたってことは他の資料を見ないとわからないはずなのです。

史資料を使って、私たちに言えるのが、「有用性 (usefulness)」と「信頼性 (reliability)」です。他のコンセプトでは「典型性 (typicality)」というのがあります。「典型性」というのは、例えば、ジェシー・オーエンス (Jesse Owens) は 1937

年に、ベルリンオリンピックで 4 つの金メダルを獲得したアメリカ人で黒人でもあるアスリートなのですが、彼の伝記 (右図参照) のようなものを読むと、彼の個人的な経験が果たしてどのくらいアメリカ全体の黒人の経験とマッチするのか、どのくらい典型的 (typical) なのか、ということもする。SHP は、コンセプトが大好きなので、そういう課題をやったりします。こういうことは小学校ではやりませんので、わかる子はすぐわかるのですが、訓練しないとわからない子はいつまで経っても「これはただの情報だ」と思っ

って、そのまま受け入れてしまうのです。

The Jesse Owens Story:
Extract 2 - Columbus (Ohio) Thursday 23 May 1935



As the three cars drove down the empty High Street they passed the Blue Moon restaurant where you could order a T-bone steak with dessert to follow for just 45 cents. However, the offer did not extend to Jesse and his fellow black athletes. Like every other restaurant on the High Street, the Blue Moon was only open to white customers. The old Union Building, where hot dogs, not steak, were always the special of the day, was the only place where blacks could eat in public. Within a few minutes Jesse's car had also passed the three main movie theatres in the town. When they opened that evening all three would be reserved for 'Whites Only'. The only cinema that would admit black people was the crumbling Rex, on the far side of town, which sold 'cullud seats' in the top six rows of its dingy balcony. None of Jesse's white team-mates seemed to notice. 14,000 people attended Ohio State University, yet there were fewer than a hundred black students and they were not allowed to stay on campus. Jesse and his friend, Dave Albritton, were forced to share the top floor of a boarding house well away from the University. Dave often moaned about how they were treated in Columbus but Jesse had experienced even worse places travelling to athletics meetings in other parts of the country. In 1933, he had driven through Indiana, stopping at a town called Kokomo. Jesse did not stay long once he heard that a young black man had been lynched the day before. The body had been strung up and left to dangle in the breeze as the citizens of Kokomo picnicked around the tree. Halfway between Columbus and Ann Arbor, Jesse and his fellow athletes stopped for breakfast at a place called Finlay. The diner was half empty and there would have been enough seats for all the athletes. However, like most places on the road this was a 'White Only' restaurant and Jesse and his fellow black athletes had to remain in their cars as the white athletes sat down inside the diner.

Just after dawn on Thursday 23 May 1935, Jesse Owens swallowed a moan as they hoisted him into the car. He had seriously injured his back playing touch football with a couple of friends just a few days earlier. In addition to a slipped disc, his vertebrae were swollen and out of joint. On Saturday Jesse hoped to compete in the Western Conference athletics championship in Ann Arbor, Michigan. Before then, he was in for a long and agonising ride. Sixteen athletes and two coaches were squeezed into three old cars and the journey from their home town of Columbus to Ann Arbor would take six hours.

Q10 : 同僚の教師と一緒に教材や評価を考えて作り上げていくのですか？

A10 : そうですね。ただ、今の状況だと同僚の教師も歴史だけ教えているわけではありません。私も 1 コマほど地理を教えているのですが、他の先生も宗教と歴史を両方教えていたりします。この仕事に就いた時、契約書には「ヒューマニティーズ/ヒストリー」とありました。だから私は一応、「教えろ」と言われ

ばたぶん社会学でも教えなければいけないわけです。でも社会学くらいになると専門的知識が必要なので、担当するのは難しいです。大体私の場合は、KS3の地理とかを担当することになります。自信があるかと言われれば、付け焼刃的なことがあるのですが。ただ、第7～9学年では、歴史だけ教えている先生ばかりではないので、歴史に対して専門的な知識を持っている私や同僚の数人で大体カリキュラムは組んでいきます。あとは分担して、例えば私が第9学年の単元を全部計画して、指導案を書きあげ、それに付属するパワーポイントとか用意します。

Q11：2～3年前にナショナルカリキュラムのKS3が変更されたと聞いたのですが、その変更についての現場の先生方の評判とかはどうでしょうか？あるいは、それほど現場には影響はないのでしょうか？

A11：基本的に私たちには教える内容を選ぶ自由が与えられたのだと思います。「サジェスティッド・トピック (Suggested Topics)」というのもあるのですが、あくまでもその選択権は学校に与えられています。もともと、イギリスには日本のように検定教科書というものがありません。ただ、網羅しなければいけない古代、中世から現代、イギリス史から世界史までいろんなトピックをカバーしつつ、ナショナルカリキュラムが掲げている「時系列理解 (Chronology)」や「因果関係 (Causation)」などの歴史概念 (コンセプト) などに触れていなければいけない。そのコンセプトの中で、今回のカリキュラム改変により強調されるようになったのが「歴史的重要性」や「多様性/相違性」です。「歴史的重要性」は歴史人物、事件が歴史の流れの中でなぜ重要視されているのかを理解するためのコンセプトです。「なぜ私たちはヒトラーについて学ぶのか」「彼が与えたインパクトはなんだったのか」「なぜ毎年毎年バトル・オヴ・ヘイスティングズ (the Battle of Hastings) を学ぶのか」「なぜこれがイギリス史において衝撃的な出来事 (ターニングポイント) だったのか」というのを教えるのが理想です。あとは、さっきも言った「多様性/相違性」が大事です。歴史は王朝史を学ぶだけでなく、たとえば封建領主のもとで生きてきた農民たちの生活について学んだり、第一次世界大戦を学ぶにも帝国の統治下だったインド人兵たちの歴史を学んだり、白人だけでなく黒人兵たちが担った役割などを学ぶなど、より多面的に一つの時代・事件・テーマを考察しようというものです。イギリスの歴史を学ぶにしても、いろんな民族が来て、この国は作られた、変わってきた、というのをもう少しわかりやすく、明確にしなければいけない。だからカリキュラム改変後もトピックは変わっていないのですが、トピックへのアプローチの仕方、伝達の仕方を大幅に変えました。前頁のジェシー・オーエンスの教材などはほとんど SHP の教科書を参考にしています。あの教科書は歴史のコンセプト、史料の扱い方などを子供に教えるためのタスクが豊富なのでいつも参考にしています。あれをみると現在、歴史教育でどういうところが重視されているのかを理解できます。

トピック選びに関してですが、本校では、今までは、どの学校も選びそうなスタンダードなトピックを選びがちだったのですけれども、今年は特にこのようなカリキュラム改変をうけて、例えば今まではインド独立運動について、ガンジーについても、今までは GCSE レベルのコースワークとして出てくるだけのトピックだったのを今年は第9学年に入れようと思っています。それは生徒が興味あるテーマだと思うし、生徒数の80%以上をバングラデッシュ系移民の二世、三世たちが占める我が校ではインド独立の歴史は非常に生徒にとって「関連性 (relevant; 実際的な重要性)」を持つのです。そして、ガンジーが東ロンドンを訪れたことがあるということ、実は我が校の前身となった学校を訪問したことがあるという事実も手伝って、私自身の判断でこのトピックを今年から加えることにしました。生徒たちはガンジーのような歴史的にも有名な人物をについて学ぶことによって「この人はいったい歴史的にどのくらい重要な人物なのか」、つまり「歴史的重要性」を考察するのです。また、「彼一人がインドに独立をもたらせた功労者なのか」という問題提起を他のインド独立を導いた様々な要因 (ファクター) も見て議論し、歴史概念の一つである「歴史的因果関係 (Historical causation)」を学ぶのです。

Q12：今、GCSEのコースワークの話題が出ましたが、コースワークの改編もあったと聞きましたが。

A12：大きな改編がありました。昨年からは、新しい GCSE の要領 (specification) が明らかにされらのですが、今回はコースワークが廃止されました。なぜ廃止されたかということ、QCDA (Qualifications and Curriculum Development Agency) ⁶⁾ が「コースワークはあまりにも教師が、書きなおしをさせたり、まるで最終的な形態が教師自身が書いたようなエッセイになってしまいがちで、公平性がない」としたからです。その代わりに、コントロールド・アセスメント (Controlled Assessment) が導入されました。これは、いわゆる試験のような状態でエッセイをその場で書かせるもので、史資料に基づい

たメモ（要点）を2ページまでと、エッセイのプラン（概要）を1ページ持ち込んでも良いという決まりがあり、それを見ながら、その場で時間制限内で書く、もちろん教師の監督下で書くので、下書きを移したり、他の生徒の文章を真似したりすることは禁止、といったルールがあります。コースワークが廃止され、そういうものに変更されました。だから本番一発勝負、書きなおしはできません。より公正な評価法になったといえは聞こえはいいのですが、限りある授業数で生徒たちに史資料の使い方、情報の選び方、エッセイ問題への仮説の立て方、文章の組み立て方を細かく指導することは難しいです。私も現在、試行錯誤しながら第11学年でこのコントロールド・アセスメントの指導をしています。

Q13：ペーパーテストの方はあまり変わりがないのでしょうか？

A13：ユニットが減らされました。今までは2年間で6ユニットでしたが、今は4ユニットになりました。今この学校でやっている4つのユニットの1つが「コントロール・アセスメント」。ここは東ロンドンなので、「切り裂きジャック」をテーマに。また1970年にヨークシャで同じような事件を起こしたに模倣犯がいたのですが、その2つのケースを比較するトピックを選びました。

もうひとつが、非常にスタンダードですが「ドイツ史」です。1919年の第一次世界大戦後から1939年の第二次世界大戦に入るまでのドイツの政変を追うトピックとアメリカの1941年から大体ウォータゲートまでのトピックと、「冷戦」ですね。高学年になってくるともっと現代史をやります。

3. 指導の枠組み

～採授業（Three Claims to the Throne）に関する単元（Unit3:Medieval Realms）を例に～

(1)2007年改訂ナショナルカリキュラムにおけるKS3「歴史」の学習プログラム⁽⁷⁾

	Knowledge, skills, and understanding		Breadth of study
1999年改訂	1. Chronological understanding (1. 時系列的理解)		6. KS3では、8から13までの学習を通して知識、技能、理解を培う。
	2. Knowledge and understanding of events, people and changes in the past (2. 過去の出来事、人々、変化に関する知識と理解)		7. 地域・英国・ヨーロッパ・世界の歴史を学習するには、 a. 近代史を含む歴史上の重要な事件、人物、変化を扱う。 b. 政治、宗教、社会、文化、美学、経済、技術、科学など、多様な視点から扱う c. イングランド、アイルランド、スコットランド、ウェールズの歴史を扱う。 d. ヨーロッパと世界を背景とした英国史を扱う。 e. 概観学習や深化学習をおこなう。
	3. Historical interpretation (3. 歴史的解釈)		8. 1066-1500年の英国 9. 1500-1750年の英国
	4. Historical enquiry (4. 歴史的探求)		10. 1750-1900年の英国
	5. Historical enquiry (5. 構造化と伝達)		11. 1914年以前のヨーロッパ史学習 12. 1900年以前の世界史学習 13. 1900年以後の世界史学習
2007年改訂	1. Key concepts	2. Key processes	3. Range and content
	1.1 Chronological understanding (1.1 時系列理解)	2.1 Historical enquiry (2.1 歴史的探求)	a. 歴史の学習は概観学習・テーマ学習・深化学習の組み合わせを通じておこなう。 b. 学習内容の選択においては、生徒にしっかりと年代区分を伝えるため、すべての生徒が、英国・ヨーロッパ・世界の歴史の主要な出来事・変化・展開について、認識し理解できるように配慮する。その際、少なくとも中世・近代・工業期・20世紀を含むこと。 c. 英国・ヨーロッパ・世界で並行していた出来事・変化・展開について適切に関連性をもたせる。 〈英国の歴史〉 d. 中世から20世紀までの政治権力の展開 e. イングランド、アイルランド、スコットランド、ウェールズの人々の異なる歴史と、時と共に変化する諸関係 f. 英国諸島への、諸島からの、または諸島内での、多様な人々の移動や定住の、時と共に生じた影響 g. 英国の人々の生活・信仰・考え方・感じ方が時と共に変わってきたことや、その要因 h. 貿易、植民地化、工業化と技術、大英帝国の展開、そしてそれらが英国や海外の様々な人たちに与えた影響、植民地化以前の文明、奴隷貿易の本質と影響、そして抵抗と植民地からの解放 〈ヨーロッパと世界の歴史〉 i. 過去のヨーロッパや世界の社会についての、重要な政治的・社会的・文化的・宗教的・技術的・経済的な展開と出来事の影響 j. 国々と人々との間の紛争や協力の性質の変化と、国家・民族・人種・文化・宗教の問題の継続的影響
	1.2 Cultural, ethnic and religious diversity (1.2 文化・民族・宗教的多様性)	2.2 Using evidence (2.2 証拠の利用)	
	1.3 Change and continuity (1.3 変化と継続)	2.3 Communicating about the past (2.3 過去についての伝達)	
	1.4 Cause and consequence (1.4 原因と結果)		
	1.5 Significance (1.5 歴史的的重要性)		
	1.6 Interpretation (1.6 歴史解釈)		

イギリスでは、1991年に法的拘束力を持つナショナルカリキュラムが作成されて以来、「歴史」科目は1995年、1999年に改訂が重ねられた。2007年にはさらにその一部が改訂（KS3の改訂）され、2008年から各学校において実施されている。表（前頁参照）は、この1999年改訂版と2007年改訂版のKS3についてその概要を比較・整理したものである。

この2007年改訂のナショナルカリキュラムでは、それまで「知識、技能、理解（Knowledge, skills, and understanding）」としてまとめられていた歴史学習の主要概念が、「基盤となる主要概念（Key concepts）」と「主要なスキルと過程（Key processes）」に分けられ、整理されている。ここでは、新たな概念として、「文化・民族・宗教的多様性（1.2 Cultural, ethnic and religious diversity）」と「歴史的重要性（1.5 Significance）」が提示された。また、「学習の範囲と内容（Range and content）」においては、従来のものから実質的な内容標記がさらに削減され、イギリス史、ヨーロッパ史、世界史について、大まかな指針が示されるのみとなっている。これは、学校現場においてはより柔軟なカリキュラムづくりが可能になり、教師の専門性の行使の余地を広げ、各学校の地域性、生徒の文化、宗教などの背景に合わせたトピック選びができることを意味している。なお、現在指摘されてる問題としては、歴史学習の主要概念を「基盤となる主要概念」と「主要なスキルと過程」に分けることの是非、例えば、「主要なスキルと過程」の中に「証拠の利用（2.2 Using evidence）」が位置付けられていることの是非や、結果として機械的なスキル指導が増加していることなどが挙げられている。⁽⁸⁾

(2) Central Foundation Girls SchoolにおけるKS3「歴史」のカリキュラム⁽⁹⁾

学 年	時 期	単 元 概 要
第7学年 (2008年度導入) 2週間で2授業	秋学期(2レッスンのみ)	History and Me (Evidence と chronology の概念の導入)
	秋学期前半	East London and Me (東ロンドンの移民とロンドン港湾の歴史)
	秋学期後半・春学期・夏学期前半	Medieval Realms 1066-1500 (中世イングランドの歴史) 【採取授業が含まれる単元】
	夏学期後半	Islamic Civilisation (イスラムの歴史)
第8学年 (2009年度導入) 2週間で2授業	秋学期・春学期前半	The Making of the UK (宗教的変化とその影響を中心に)
	春学期・夏学期前半	The Empire on which the Sun never sets ? (太陽の沈まない帝国?)
	夏学期後半	Stinky London (産業革命期のロンドンの環境・社会問題)
		G&T Project* (ヴィクトリア朝とそれ以降の女性運動)
第9学年 (2010年度導入) 2週間で3授業	秋学期	An Empire to be proud of? (三角貿易から奴隷制廃止運動まで)
	秋学期後半	Freedom Fighters ! (奴隷制廃止後のアメリカと黒人公民権運動)
	春学期	Gandhi - A remarkable man? (ガンジーとインド独立運動)
	夏学期	The Twentieth Century World (二つの世界大戦と冷戦)

* G&T Project とは、2010-11年度で実験的におこなわれたプロジェクト。2011-12年度ではイギリスでの女性の市民権運動を9年生の単元で学習した。

各学校における歴史カリキュラムについては、それぞれの学校の教師が作成し、実施する。Central Foundation Girls School では、2008年よりKS3において学年順に2007年改訂版歴史ナショナルカリキュラムに移行したが、表（上図参照）は、このCentral Foundation Girls School で、どの時期にどのような単元の授業が行われるのかを大まかに示したものである。これを見ると、2011年の1月に採取した伊東彩子氏の歴史授業（“Three Claims to the Throne”）は、第7学年の3番目の単元「中世イングランドの歴史（Medieval Realms 1066-1500）」の一部であることが分かる。

なお、各単元に費やす時間数はテーマによってまちまちであり、また、毎年の実践を通して、カリキュラムは常に見直され、内容に手が加えられる。また、国の教育政策、学校の方針によって、授業自体もそれに対応することを求められる。近年では、連立政権やオフステッドが読み書き能力（Literacy）に重きを置いた授業を求めているので、歴史の授業において、読み書き能力を促進するようなアプローチとなるように手を加えることが求められている。⁽¹⁰⁾

(3)Central Foundation Girls Schoolにおける“Medieval Realms 1066-1500”の単元計画・評価計画シート

About this unit

This unit covers events in the period 1066-1500. Through this unit, students are given opportunities to develop their understanding of concepts such as power and conflict and consider the significance of events such as the Battle of Hastings and the Peasants Revolt and the importance of changes caused by those events. The topics are also linked with issues of movement and settlement that students have looked at in the previous unit. The unit also focuses on people's everyday life in this period. Through various class activities and homework in this unit, students should continue to develop their historical skills and understanding of historical concepts.

Unit outline

Lesson 1 and 2: Introduction to the unit– Overview of Medieval history
Why did people want to come to England in the 11th century?
Lesson 2-4: 1066: A year of crisis – Why was 1066 a year of crisis?
Lesson 5: England under attack! – Essay: Why did William win?
Lesson 6: Whose story does the Bayeux Tapestry tell?
Lesson 7: Who told the truth about 1066?
Lesson 8: William's problems
Lesson 9: Keeping control!
Lesson 10: Mystery: Why is the king being whipped?
Lesson 11: How successful was King John?
Lesson 12: Magna Carta – Road to democracy?
Lesson 13: Why was the Black Death so terrifying?
Lesson 14: Why did the Peasants' revolt?
Lesson 15: Revision and planning for the End of Year Assessment
Lesson 16: The End of Year Assessment (Was the Black Death a disaster?)

Assessment opportunities

-Through classroom dialogues (questioning based on Bloom's taxonomy, teachers should be able to encourage students to develop their source-analysis skills and skills in persuasive and explanatory speeches.

-Through all the assessment opportunities in this unit, students are expected to make 2 sub-levels of progress based on the new National Curriculum attainment targets for history.

-Students are given opportunities to demonstrate a variety of skills including source-analysis skills and structured writing skills.

-All the assessment criteria used in this unit are based on the new National Curriculum. More able students should aim at achieving Level 5 and above (Begin to develop historical explanation using a range of sources). Most able ones should start consider the utility and reliability of sources and carry out more independent research on topics

Resources

Resources for each lesson are indicated in the detailed lesson outline on the following pages.
Any resources created using PowerPoint and Word are saved under Staff-shared – Humanities – History – Yr7 Unit 3 Medieval Realms folder.
Any worksheets, information cards, picture cards, etc. are kept in the wooden tray in G37. Please return them after use.

The following sites have some interactive activities:
<http://www.historyonthenet.com/>

Timing	Concepts and Themes	Learning Objectives	Suggested Activities	Assessment Opportunities	Notes
1	1.1 Chronology 1.3 Change and continuity 2.3 Communicating about the past Medieval Times Period Monarch King Noble Knight Merchant Peasant Bishop Power Significance Motives	<u>Why go to England?</u> Could: -Understand the nature of various motives (economic, political, etc) for coming to England in the Medieval Times. -Compare the differences in the motives for movement and settlement between the Medieval times and today. Should: -Identify the nature of some of the events in the period 1066-1500. -Explain what is happening in each picture. -Begin to understand the hierarchy system in Medieval England. -Understand a variety of motives for coming to England and prioritise some of the motives. Must: -Describe what is shown in the pictures. Match pictures with descriptions. -Understand the meaning of key terms (Listed on the left) -Understand some of the motives for coming to England in the 11 th century.	Please make sure students fill in the 'KS3 History self-evaluation sheet' and set themselves targets for this unit. 1, PPT 'Why go to England?' – Show the pictures on slide 1. Students to describe pictures in their own words (For differentiation – Show the descriptions to match up with). 2, Introduce the lesson objectives (Slide 2). WS 'Medieval England 1066-1500' – Students to complete the tasks individually/in pairs. 3, Brainstorm the possible reasons why people wanted to come to England in the 11 th century (Slide 3). 4, Show slides 4 and 5. Students complete tasks on WS 'Why did people come to England in the 11 th century to understand 'pull' and 'push' factors. 5, Students complete an extended piece of writing explaining the reasons why people wanted to come to England in the 11 th century. See Slide 6 for the success criteria.	Through class discussions – source-analysis skills Bloom's Taxonomy – Label, describe and explain Extended piece of writing – Why did people want to go to England in the 11 th century?	Link to the immigration changes in Spitalfields Students can consider the 11 th century world in a wider context
2	2.1 Historical enquiry Literacy – Persuasive techniques: • Rhetorical question • Repetition • Emotive language • Exaggeration • Facts and statistics • Groups of	<u>Three men and a crown – Part 1: Introduction to persuasive speech</u> Could: -Compare the nature of today's monarchy and the monarchy in the 11 th century and notice any differences. -Deliver a speech using a range of persuasive techniques and a variety of connectives. Should: -Understand the key features of persuasive techniques. -Deliver a persuasive speech using 3-4 techniques and some	1, PPT 'Three men and a crown' – Introduce the topic. Students consider the reason why 1066 was a year of crisis. Explain the learning objectives of Lessons 5-6 (Deliver a persuasive speech on 'Who should be the next king?'. You do not need to go through the whole PPT (This should be done in Lesson 3). Just introduce the topic and the learning objectives. 2, PPT 'Delivering a persuasive speech in History' – Discuss what makes a persuasive speech. 3, Card-sorting activity to identify	This year (2010-11) I delivered Lesson 3 first (teach the content) and then did Lesson 2 (teach persuasive speech techniques) – which I thought worked better. So please deliver whichever you think would suit your class.	Lessons 3-5 are focussed on students' literacy development through history, especially skills in a persuasive speech. Lesson 3 is an introductory lesson in which students develop their understanding of a 'persuasive speech' using a non-history related example.

	<ul style="list-style-type: none"> three personal pronouns Criticise the other person's point of view Alliteration 	<p>connectives.</p> <p>Must:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Understand the reason why 1066 was a year of crisis. -Deliver a persuasive speech using 1-2 key techniques. 	<p>persuasive techniques.</p> <p>4, Students plan a speech on a non-history related topic such as 'Who should be the X-factor winner?' (The topic is decided at the teacher's discretion. Provide any question as long as it's interesting, simple and easy for students) – WS 'How to deliver a persuasive speech?' available.</p> <p>5, Students deliver a speech.</p>	Peer-assess their speeches.	
3	<p>2.1 Historical enquiry</p> <p>2.2 Using evidence</p> <p>2.3 Communicating about the past</p> <p>Literacy development – Persuasive techniques</p>	<p><u>Three men and a crown – Part 2: Collect evidence for a persuasive speech</u></p> <p>Could:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Understand a variety of reasons. -Consider both advantages and disadvantages of each contestant. <p>Should:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Identify 3-4 reasons for their claims and explain them. <p>Must:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Identify three people who claimed the English throne in 1066. -Describe 1-2 simple reasons for their claims. 	<p>1, Re-cap: Persuasive techniques.</p> <p>2, PPT 'Three men and a crown' – Explain the three main claims (Harold Godwinson, Harald Hardraada, William of Normandy) to the throne in 1066.</p> <p>3, Students work in groups of three. Each person finds out about one of the contestants using WS 'The three claims to the throne in 1066'. Fill in a factfile sheet.</p> <p>4, Present their findings in groups. Exchange information so all the students can fill in all the sections on their sheets.</p>	Extended writing H/W – Write at least three paragraphs on 'Who should be king?' – This can be assessed by using NC based assessment criteria.	Lesson 4 is preparation for their persuasive speech in Lesson 5.
4	<p>2.1 Historical enquiry</p> <p>2.2 Using evidence</p> <p>2.3 Communicating about the past</p> <p>Literacy development – Persuasive techniques</p>	<p><u>Three men and a crown – Part 3: Deliver a persuasive speech on 'Who should be the king?'</u></p> <p>Could:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Deliver a speech using a variety of persuasive techniques -Explain a variety of reasons for their choice. <p>Should:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Deliver a persuasive speech using 3-4 techniques and some connectives. -Explain 3-4 reasons for the claims. <p>Must:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Deliver a persuasive speech using 1-2 key techniques. 	<p>1, Re-cap: The three claims to the English throne in 1066. Card-sorting activity. Discuss the main reasons for their claims. G&T – focus on similarities and differences. (PPT Revising Persuasive techniques available to remind students of key points for their speech)</p> <p>2, Students work in groups of 3. Each student supports one of the contestants. Prepare their speech using their factfile sheet (filled in Lesson 4) and WS 'How to deliver a persuasive speech?'</p> <p>3, Deliver persuasive speeches in groups and peer-assess them.</p> <p>4, Some of them can deliver speeches in class.</p> <p>5, Discuss who had the best claim to the throne.</p>	Peer-assess their speech. For teachers - No need to be levelled.	MRO has 10 easy-use camcorders (You need to book them in advance). Teachers might want students to record their own speeches.
5	<p>1.2 Chronology</p> <p>1.3 Change and continuity</p> <p>2.1 Historical enquiry</p> <p>Causation, reasoning</p> <p>The Normans</p> <p>The Saxons</p>	<p><u>England under attack!</u></p> <p>Could:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Compare different reasons and prioritise them. -Give detailed explanation and make links between reasons using connectives. <p>Should:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Explain most reasons for William's victory. -Explain reasons in structured sentences. <p>Must:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Extract information and give simple explanation of some reasons why William won at Hastings. 	<p>1, Re-cap / Starter: PPT England Under Attack! - Look at a scene from Bayeux Tapestry. Identify the key figure in the picture.</p> <p>2, Introduce the learning objectives. Slides 3-5 to explain the two battles in 1066.</p> <p>3, Main task 1 – <u>Why did William win in 1066?</u> Students investigate the reasons for William winning the battle in 1066 by reading information sheet. Students to fill in the 'evidence collection' sheet.</p> <p>4, Main task 2- Essay writing (Spring term formal assessment). Introduce the success criteria. Students to complete their essays using the writing frame provided*.</p>	<p>H/W sheet – Events in 1066 –students to put event in chronological order.</p> <p>Bloom's – Prioritise, reasoning</p> <p>Jan 2011 This essay is for Spring Term formal assessment. Please level their work according to the markscheme.</p>	<p>Slides 6-8 to be used for supporting visual learners / SEN & EAL students.</p> <p>*G&T students could complete their essays without using a writing frame.</p> <p>*Students aiming for Level 7 should carry out their own research.</p> <p>*They should finish their essays for homework. Allow them to have at least 2 weeks.</p>
6	<p>2.1 Historical enquiry</p> <p>2.2 Using evidence</p> <p>One-sided, partial</p> <p>Limitations of sources</p>	<p><u>Whose story does the Bayeux Tapestry tell?</u></p> <p>Could:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Consider the limitation of the sources -Explain which tapestry most suggest the tapestry is on the Norman side or the Anglo-Saxon side. <p>Should:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Make inferences from a scene from the Bayeux Tapestry -Analyse other scenes from the tapestry and work out whose side (Normans/Anglo-Saxon) the tapestry is on. <p>Must:</p> <ul style="list-style-type: none"> -Describe what can be seen in the pictures. 	<p>PPT 'Whose story does the Bayeux Tapestry tell?'</p> <p>1, Slide 1 – Picture analysis for starter</p> <p>2, Introduce an evidence frame – WS 'Whose story does the Bayeux Tapestry tell?'</p> <p>3, Complete the frame using the statements on WS.</p> <p>4, Analyse other scenes from the tapestry. Students to consider whose side the tapestry is on and give reasons for their opinions.</p>	Different levels of questioning – Key words: Describe, infer	
7	2.1 Historical	<u>Who told the whole truth about</u>	PPT 'Who told the whole truth about		All the resources are

	enquiry 2.2 Using evidence One-sided, partial Limitations of sources Historical interpretation	<u>1066?</u> Could: -Consider what factors would affect the usefulness or reliability of sources Should: -Explain what point of view each source supports and consider why. -Understand all the sources can be one-sided and have limitations Must: -Extract information from sources and describe what story the sources tell about 1066.	<u>1066?</u> 1, Starter – In pairs, students read either <u>John</u> or <u>Guillaume</u> sheet. Discuss how they think the monk might have answered the questions in the speech bubbles. 2, Read <u>John's account</u> and understand his interpretation of the events in 1066. 3, Highlighting activity. Extract information from <u>Guillaume's sheet</u> and fill in <u>the table</u> (Activity sheet). 4, Plenary – Discuss what factors affected their points of view/ their interpretation of the events of 1066.	Class discussion on historical interpretation	hyper-linked. Just click(or CTRL+Click) to access them
8	2.1 Historical enquiry Reasoning Prioritising	<u>William's problems</u> Could: -Suggest possible solutions to the problems and give clear reasons Should: -Prioritise the problems and give simple reasons. Must: -Identify problems faced by William after he came to the throne. -Match the problems with the right solutions	<u>No PPT for this lesson.</u> 1, Recap on events in 1066. Discuss what situation William was in when he became king – possible problems? 2, Using WS ' <u>William's problems</u> ', prioritise the problems to solve and match the problems with the solutions. 3, Extension work for G&T. Explain reasons for their points of view. Why is one issue more urgent than another?	Extended piece of writing	
9	1.4 Chronology 1.5 Change and continuity (Castles) 2.1 Historical enquiry The Feudal System Castles	<u>Keeping control!</u> Could: -Explain how the feudal system helped William control England. -Evaluate the effectiveness of methods used by William to control England. Should: -Understand the importance of land in the feudal system. -Explain how the castle design changed and provide the reasons why it changed. Must: -Identify different groups of people in Medieval Realms. -Describe what their duty and rewards were. -Describe the key features of early and later castles.	PPT ' <u>Feudal System and Castles</u> ' 1, Starter- Feudal System role play – each student is given a <u>role card</u> – King, baron/bishop, knight or peasant. Read info on the card and find out what their duty and rights are. 2, They'll create a 'human hierarchy diagram'. Work out who promised to be loyal to whom and who gets what in return?, etc. 3, Draw a feudal system diagram in their books. 4, Castle overview sheet (Laminated sheets in G37) and complete tasks. 5, Plenary – Discuss how the Feudal system and castles helped William control England.	Classroom dialogue – role-play activity	
10	1.4 Chronology 2.2 Using evidence Causal explanation	<u>Mystery: Why is the king being whipped?</u> Could: -Use variety of linking words such as 'this suggest that', 'this led to' to develop explanation. Should: -Identify clear links between events and explain how each event led to the death of Thomas Becket. -Explain why Henry II was whipped. Must: -Understand the chronology of key events which led to the death of Thomas Becket	PPT ' <u>Why is the king being whipped?</u> ' 1, Slide 2 – Discuss the possible reason why the king was whipped. 2, Step 1 - Read the clue sheet and complete the timeline (<u>Template available</u>) 3, Discuss links between events (Step 2). 4, Step 3 - Extended piece of writing to explain why Henry II is being whipped. Share the markscheme.	Extended writing – Explain how to achieve Level 5 (Developed explanation using various connectives)	
11	2.1 Historical enquiry 2.2 Using evidence Historical interpretation	<u>How successful was King John?</u> Could: -Using various sources and test a hypothesis: 'The barons rebelled against King John in 1216 because he was not a good military leader' Should: -Analyse various sources and explain how successful King John was. Must: -Describe key events in the life of King John which made him famous.	PPT ' <u>King John</u> ' 1, Starter discussion: What makes a good king. 2, Students to read various sources and find evidence which supports the view that King John was a bad/good king. G&T – Hypothesis testing: 'The barons rebelled against King John in 1216 because he was not a good military leader' 3, Plenary discussion: How successful was King John? Prioritise factors (G&T)		
12	2.1 Historical enquiry 2.2 Using evidence Historical interpretation Rebellion Magna Carta	<u>Magna Carta - Road to democracy?</u> Could: -Evaluate the success of Magna Carta. Should: -Explain why Magna Carta was important. Must: -Describe how Magna Carta restricted the power of King John	PPT ' <u>Magna Carta – Road to Democracy?</u> ' 1, Re-cap: King John – Success and failure 2, Intro to Magna Carta – Read <u>WS</u> Magna Carta 3, Card-sorting – Find evidence which supports the view that Magna Carta was successful. G&T – Identify specific groups of people who benefited from Magna Carta. 4, Plenary discussion - Magna Carta – Origin of democracy?		
13	2.1 Historical enquiry	<u>Why was the Black Death so terrifying?</u>	PPT ' <u>Why was the Black Death so terrifying?</u>		

	2.2 Using evidence Historical interpretation Plague	Could: - Analyse what actions were taken to stop the spread and evaluate the impact of the actions. Should: - Explain how medieval people thought it was spread Explain. Explain how the disease was really spread Must: - Describe what the Black Death was.	1, Starter: William's story (worksheet – hard copies in G37) 2, Identify the symptoms of the Black Death and learn how the plague spread. 3, Find out how people tried to cure the disease. Evaluate the impact of the actions. (G&T) 4, Plenary: Why was the Black Death so terrifying? – possible impact of the plagues on people's lives.		
14	1.3 Change and continuity 2.1 Historical enquiry Revolt	Why did the Peasants' revolt? Could: - Prioritise the reasons for the revolt and justify your argument Should: - Explain various reasons why the peasants revolted Must: - Describe events in 1381 and give simple reasons for the Peasant's Revolt	1, Starter: Reasons for revolt 2, Re-cap: King John and the Black Death – changes in peasants' life 3, Summarise the reasons for the revolt 4, Prioritise reasons – G&T justify their reasons by explaining why one reason is more important than others. 5, Plenary discussion		
15	1.3 Change and continuity 2.1 Historical enquiry 2.2 Using evidence	<u>Preparation for the End of Year Assessment</u>	PPT <u>Was the Black Death a disaster?</u> Starter Go through the assessment criteria Card-sorting Writing frame		
16		<u>The End of Year Assessment</u>	Students to complete their essays in timed conditions <u>Differentiated paper</u> available Student may use sources as prompts	Markscheme here	

これは Central Foundation Girls School で作成された、第7学年の歴史の第3単元「中世イングランドの歴史 (Medieval Realms 1066-1500)」単元計画・評価計画シートである。このシートには、まず、この単元の概要 (About this unit) の部分に「この単元は 1066 年から 1500 年までの出来事を扱っている。この単元を通じて、生徒たちは権力と紛争といった概念の理解を成長させ、ヘイスティングスの戦いと農民一揆 (ワットタイラーの乱) といった出来事とそれらによってもたらされた変化の重要性を考える機会が与えられる。この単元は前単元で学んだ移動と定住の問題とも関係する。この単元では人々の日々の生活にも焦点をあてる。この単元の授業や宿題を通して、生徒たちは歴史のスキルと歴史的概念の理解を成長させ続けるべきである」と示され、単元全体の目標が明らかにされている。

次に、単元の構成 (Unit outline) の部分では、第1時 (Lesson1) から第16時 (Lesson16) までのタイトルが示されている。これを見ると、第1時から第2時までが単元の導入、第2時から第9時までがヘイスティングスの戦いを通じたウィリアム1世による封建社会の成立、第10時から第12時までがヘンリ2世およびジョン王時代のマグナ=カルタ、第13時から第14時までが黒死病の流行と農民の台頭を題材にし、最後に第15時と第16時で「黒死病は災厄だったのか」というテーマでエッセイを作成する構成になっていることが分かる。

実際の単元計画・評価計画は縦軸が時間 (Timing)、横軸が左から順に「概念とテーマ (Concepts and Themes)」「学習目標 (Learning Objectives)」「学習活動 (Suggested Activities)」「評価場面 (Assessment Opportunities)」「注意点 (Notes)」となっており、採取した伊東彩子氏の歴史授業 (“Three Claims to the Throne”) は、この表の第3時 (下図、第3時の和訳版) にあたり、授業は、概ね計画に基づいて実施されていることが分かる。

時間	概念とテーマ	学習目標	学習活動	評価場面	留意点
第3時	2.1 歴史的探求 2.2 証拠の利用 2.3 過去についての伝達の成長 読み書き能力のある 一説得力のある テクニク	3人の男と王冠- パート2: <u>説得力あるスピーチの為の証拠を集める。</u> できれば: ・ 色々な理由を理解する。 ・ 3人それぞれの有利な点と不利な点を考慮する。 できるはず: ・ 3人それぞれが王位を要求する理由を3~4点明確にし、説明する。 できなければならない: ・ 1066年にイギリスの王位を要求した3人を特定する。 ・ 3人それぞれが王位を要求する1~2の理由を簡潔に描写する。	1. 復習: 説得力のある諸テクニク 2. プレゼンテーション 「3人の男と王冠」 ・ 1066年に王位を主張した3人の主な理由を説明する。 3. 生徒は3人のグループで作業をする。1066年に王位を主張した3人についてそれぞれ書かれたワークシートを、生徒は1枚ずつ分担して理由を見つけ出す。生徒は担当した人物の理由を基礎データシートに書き込む。 4. 各グループの中で、それぞれの生徒が見つけた理由を提示する。情報を交換し、すべての生徒が基礎データシートのすべての欄を埋めることができる。	追加の作文 (宿題) - 「誰が王であるべきか」について少なくとも3文で書く。 - これはナショナルカリキュラムに基づいた評価基準によって評価することができる。	次の第4時では第5時で説得力のあるスピーチをするための準備を行う。

この単元計画・評価計画を見ると、「概念とテーマ」の欄に示された概念等からは、各時間（Lesson）が先述したナショナルカリキュラムの「基盤となる主要概念（Key concepts）」及び「主要なスキルと過程（Key processes）」と明確に関連づけられていることが分かる。また、連立政権やオフステッドが求めている読み書き能力（Literacy）の指導とも関連づけられていることが分かる。

「学習目標」の欄には、各時間の授業の目標が示されており、具体的に授業を通じて何が「できなければならない」のか、「できるはず」なのか、「できれば」優れているのかが明示されている。

「学習活動」の欄には、生徒への指導計画が時系列で示されている。ここでは、どのような教材（プレゼンテーション、スライド、史資料、ワークシートなど）を用いるか、生徒にどのような活動や作業（話し合い、情報整理、スピーチ、エッセイなど）をさせるのかが具体的に示されている。ここからは、Central Foundation Girls Schoolの歴史授業が、決して単調なものではなく、多様な学習プロセスを計画的に取り入れていると同時に、生徒が積極的に授業に参加することを前提にしていることが分かる。

「評価場面」の欄では、授業を通じて生徒の何を、どう評価するのかが明示されている。これを見ると、評価は、授業において行った話し合い、短い作文、エッセイ、ロールプレイ、スピーチおよび授業後の宿題などといった活動や作品が評価材料となっており、授業と評価が不可分のものになっている。その意味で「指導と評価の一体化」が具現化されている。また、その際の評価の基準はナショナルカリキュラムに示されている評価基準（Attainment target）とも関連づけられており、ナショナルカリキュラムに対応した「指導と評価の一体化」が意図されている。

また、この単元計画・評価計画では、先述のPEELによる評価も、第2時と第4時に実施されていることが分かる。右図は、第4時に実施されたこのPEELについての生徒どうしの相互評価表であり、説得力あるスピーチについて、互いに評価し合いながら、生徒自身に

Persuasive speech peer assessment: Who should be king?			
Your name:	Form:	Date:	
The person you are observing:			
Assessment Criteria	😊	😐	😞
How <u>clearly</u> does the person speak?			
Does she explain <u>what topic</u> she is going to discuss? (The beginning of her speech)			
Does she clearly <u>explain at least THREE reasons</u> why he (Harold/Harald/William) should be king?			
Is she using a variety of <u>connectives</u> to link her points? e.g. First of all, moreover, however, etc.			
Is she using the following <u>persuasive techniques</u> ?			
Persuasive technique (1) – Emotive language			
Persuasive technique (2) - Exaggeration			
Persuasive technique (3) - Repetition			
Persuasive technique (4) - Alliteration			
Persuasive technique (5) – Personal pronouns			
Persuasive technique (6) – Groups of three			
– Criticise the other			
Persuasive technique (7) person's point of view			
Is she emphasising her main arguments in her <u>conclusion</u> using a dramatic sentence?			
Make notes on what you hear			
What were her main reasons why he should be king? (Write down <u>at least</u> three points)			
Overall judgement:	Satisfactory	Good	Excellent
Because>>>			

説得力あるスピーチの要件を認識させる指導がなされていることが分かる。

単元の最終段階に当たる第15時と第16時では、「黒死病は災厄だったのか」というテーマでエッセイを作成

しているが、このときに使用される評価表（下図参照）を見ると、「伝達の構造（Communication and Structure）」

Was the Black Death a disaster?			
SUCCESS CRITERIA	COMMUNICATION AND STRUCTURE	HISTORICAL EXPLANATION	✓
	LEVEL 8	Exceptional!!! Very well-structured and carefully planned essay. Positive use of historical terminology and various connectives	Substantiated judgement A well-argued essay with a conclusion that has a substantiated judgement. You've shown independent enquiry skills and used additional evidence to support your argument.
LEVEL 7	Superb!!! Your essay is well structured and relevant to the question. Appropriate use of historical terminology. Excellent use of connectives	Well-justified argument! Various effects of the Black Death are clearly explained and supported by various sources of evidence. Order of importance is very sensible. A well-balanced argument with clear reasons.	
LEVEL 6	Excellent Your essay is clearly structured and mainly relevant to the question. You use various historical terms. Good use of connectives.	Developed explanation Various effects of the Black Death are explained and supported by some good evidence. Order of importance is sensible and explained in conclusion. Relatively balanced argument.	
LEVEL 5	Very good Your essay is structured in sentences and clear paragraphs, but may not have a clear conclusion. Limited use of historical terms.	Sound explanation Various effects of the Black Death are explained. Both sides of the argument are discussed but not well-balanced. Order of importance is partly explained in the main body and conclusion but not clearly justified.	
LEVEL 4	Good Your essay is structured and in full sentences, but may not have good use of paragraphs and connectives.	Developed statements Some of the effects of the Black Death are given. Most reasons are explained in a sensible order but not well supported by evidence	
LEVEL 3	Basic Your essay is not clearly structured. Information has been copied, and/or relevant points have not been sorted.	Brief statements A few effects of the Black Death are given but with little explanation. The order is unclear.	

My attained level	My next target level
My teacher's feedback	
My partner's feedback	
Have you read all the feedback? Now write 2 action points on your learning journey log sheet!!!	

と「歴史的説明（Historical Explanation）」について6つのレベルで評価基準が明示されている。この評価表から判断すると、Central Foundation Girls Schoolでは、この単元において、より説得力のある歴史的な説明を生徒が構成できるようにすることを大きな目標のひとつとして指導が行われていたと考えられる。

なお、この単元計画・評価計画には、他の教師が他年度にこの単元を指導する時のため、先年度の授業者によって指導上の気づきやヒントが所々に書き込まれている。例えば、第2次の「評価場面」の欄には、「2010年度に私は第3時を先に行い、第2時を行った。私はその方がより良いと思ったからだが、あなたの授業ではどちらにするか適切に決めて下さい」と書き込まれており、この単元・評価計画表が複数の教師によって共有されながら、洗練されたものへの進化している様子が見える。

4. Central Foundation Girls School情報



○ Central Foundation Girls School の Web ページ, <http://www.central.towerhamlets.sch.uk/cfgs/>

○ Central Foundation Girls School に関する Ofsted 情報の Web ページ,

<http://www.ofsted.gov.uk/inspection-reports/find-inspection-report/provider/ELS/100975>

5. 日本の歴史授業に示唆するもの

(1) 史料に向かい合わせること

この授業は導入段階で史料として「バイユーのタペストリー」にじっくりと向き合わせ (pp.1-3), どのような人や物が描かれているかをじっくり読み取らせ、話し合わせることからスタートしている。そして、その後の授業ではその史料の背景を探る展開になっている。

2008 年告示の小学校・中学校学習指導要領社会科や 2009 年告示の高等学校学習指導要領地理歴史科では、多様な資料等の活用が強調されている。この学習指導要領に対応した評価の観点にも「資料活用の技能」が独立して示された。今後、日本で行われる歴史授業においては、これまで以上に史資料の活用についての工夫が求められる。ただ、史資料は、その扱いを一步間違えば、教師の解釈をただ児童生徒を信じ込ませるための道具になりかねない。その意味で、この授業はビジュアルな史料にじっくりと生徒を向き合わせ、じっくりと読み取らせながら、史料を解釈させようとしている点に特長がある。これは、歴史が史料を通じて解釈されるものであることを生徒に理解させるための重要なアプローチとなっており、生徒の学年段階からすると、この授業では史料の読み取りが中心になっているが、おそらく、学年が上がるにつれて、批判的な資料の読み取りにも発展するものと思われる (pp.18-19, Q9A9)。

(2) 「自分の言葉で」語る歴史～ Persuasive speech ; 説得力のあるスピーチ

この授業の展開部では、生徒に三人の王位継承権を主張する人物の主張の正当性を話し合いを通じて検討させ、三人の内の誰が王位を継承すべきであったかについて自分の意見をまとめさせ、クラスメートを説得するスピーチをつくらせるようになっている (pp.5-9)。このプロセスを通じて、生徒は史料と自らの解釈・判断によって、自らの主張を構想することになる。そして次の時間には、生徒は自分の意見を主張するために、説得力のあるスピーチ (Persuasive speech) について学ぶことになる (pp.17-18, Q6A6)。このような指導を通じて、生徒は歴史は思考し判断するものであることを認識する。

2008 年 9 月に刊行された中学校学習指導要領社会科歴史的分野の解説には「自分の言葉で」表現することが重視されているが、「自分の言葉で」語るには、生徒自らが歴史について思考し判断する過程が不可欠であることは自明であろう。その意味で、この授業は、生徒に自分の考えを持たせる指導をスピーチへと結びつけようとするものとして示唆するものが多い。

(3) 計画的指導と評価

この授業は、p.22 に示した KS3 「歴史」カリキュラムと pp.23-28 に示した単元計画・評価計画シートをみると、第 7 学年 KS3 の秋から夏にかけて行われる単元、Medieval Realms 1066-1500 の第 3 時間目の授業として実施されたものであることが分かる。Central Foundation Girls School では、ナショナルカリキュラムに準じながら、学校でこのようなカリキュラムや単元計画・評価計画を設計し、授業を実施している。

この単元計画・評価計画を見ると、ナショナルカリキュラム等に関連させた「概念とテーマ」，“できれば (Could)” “できるはず (Should)” “できなければならない (Must)” の三段階で明示された「学習目標」、具体的な指導計画としての「学習活動」、授業を通じて生徒の何をどう評価するかといった「評価場面」などが各時間ごとに明示されている。この単元計画・評価計画の第 3 時間目の内容 (p.24, 和訳 p.26) を見ると、授業は、概ね計画に基づいて実施されていることが分かる。

このような単元計画・評価計画は、Central Foundation Girls School で歴史を担当する教師が互いの指導の経験と反省を共有しながら形作られたものであろう。このような計画があつて初めて、1 時間ごとの授業の位置付けが明確になると同時に、毎時間、教科書を通史的に解説して終わるような“金太郎飴”のような授業ではない、様々な作業や活動等を取り入れた授業が展開できる。そして、計画的に行なわれる作文やエッセイ、ロールプレイ、スピーチ、宿題といった活動や作品が計画的に評価の材料となっていく。日本では、特に中学校、高等学校において、観点別評価の難しさが現場の教師から指摘されるが、“金太郎飴”のような授業では、観点別評価を実施することは覚束ないだろう。この Central Foundation Girls School の単元計画・指導計画は“指導と評価の一体化”を実現する“すべ”として大いに参考になる。ちなみに、日本では定期試験等の結果が成績表を大きく左右する傾向があるが、この Central Foundation Girls School では定期試験は実施されない。Medieval Realms 1066-1500 の単元の指導計画・評価計画の 16 時間目に生徒にエッセイを作成させ、その結果と 1 時間目から 15 時間目までに収集した生徒の作品や作業の結果をもとに成績を出す。成績表は日本のような 5 段階、もしくは 10 段階の数値で示されるのではなく、p.28 に示されたような形式で示される。これを見ると「伝達の構造 (Communication and Structure)」と「歴史的説明 (Historical Explanation)」について 6 つのレベルで評価基準が明示されている。この評価表から判断すると、Central Foundation Girls School では、この単元において、より説得力のある歴史的な説明を生徒が構成できるようにすることを大きな目標のひとつとして

指導が行われていたと考えられる。

英国であっても、日本であっても、おそらく生徒は評価されるものを身につけようとする。同じ歴史教育と言っても、日本の生徒と英国の生徒が歴史教育を通じて身につけるものには大きな違いがあると思われる。Central Foundation Girls Schoolの伊東氏の実践は、我々日本の歴史教育に携わるものにとって、これからの時代を生きる生徒たちに、どのような力をつけるべきなのか再考する契機にもなる。

【注】

- (1) イギリスでは学習段階として、初等教育段階は Key stage 1(5～7歳, 第1～2学年), Key stage 2(7～11歳, 第3～6学年), 前期中等教育は Key stage 3(11～14歳, 第7～9学年), 高等学校に相当する後期中等教育は Key stage 4(14～16歳, 第10～16学年)に区分されている。以下, Key stage は KS と示す。
- (2) 伊東彩子氏の資料提供をもとにした。以下の Web サイトにもそのもととなったと思われる資料が示されている。
<http://www.history-department.com/Battle%20of%20Hastings.htm>
- (3) リーズ・トリニティ・カレッジ大学 (Leeds Trinity University College) に拠点を置く歴史教育研究団体。1972年に設立され, その活動はイギリスの歴史教育に大きな影響を与えている。
<http://www.schoolshistoryproject.org.uk/index.php>
- (4) General Certificate of Secondary Education の略称。義務教育修了時までには受験する全国統一試験。大学進学や就職をする際の選考基準として広く採用されている。
- (5) The Office for Standards in Education の略称。Ofsted は, 1992年に設立されたイギリスの学校評価機関(政府から独立した第三者機関)のことで, 弁護士, 会計士, 教職経験者, 学識経験者などで構成する視学官 (Inspector) が, 通常4人でチームを組んで学校を訪問し, 学校評価を行ない, その上で教育の成果と質を高めるための報告とアドバイスを行う。各学校ごとに, 平均的には4年に1回程度の評価が実施される。結果は Web ページ上に公開される。
<http://www.ofsted.gov.uk/>
- (6) QCDA は, 1997年教育法に基づいた設立された政府機関 QCA (Qualifications and Curriculum Authority; 資格カリキュラム機構)の後継機関として2008年に設置され, 学校教育カリキュラムの具体化や GCSE などの試験制度に関わる。2012年に閉鎖され, 現在はその業務を STA (Standards and Testing Agency) が行っている。
- (7) 二井正浩「平成20年版学習指導要領と2008年版英国ナショナルカリキュラムにおける歴史学習」, 『社会系教科教育学研究』第20号, 2008年, p.55の表1をもとに作成。
- (8) この段落の内容については, 伊東彩子「イギリスにおける歴史教育の動向—研究と実践から見出される展望と課題—」, 『社会科教育研究』No.116, 2012年, pp.115-116をもとにした。
- (9) 同上書, p.120の表2, 及び, 伊東彩子氏の情報提供をもとにした。
- (10) 伊東彩子氏の情報提供をもとにした。

《なお, 本資料で紹介した Central Foundation Girls School の授業やインタビューおよび評価関連の資料は, すべて伊東彩子氏に提供して頂いたものである。伏して感謝したい。また, 資料等の解釈や英文翻訳に誤りがあれば, それはすべて資料を整理した二井の責任である。

また, 授業の採取およびこの報告は, 平成22～24年度科学研究費補助金基盤研究B「市民性諸教科における教科書および指導・評価の一体化に関する国際比較研究」(研究代表者; 岩田一彦)による研究成果の一部である。》